

集団 不定形



五五

¥ 150
35

京都アナキズム研究会

うじ虫の独叫が不毛の町にひびくとき
俺達はブラジャーもパンティーも脱ぎ
捨てて

ペニスを一六〇度に勃起させ
ふるえて死ね

ベットリとした精液の中を

コココーラに乗せた バスが走る

マツチ箱の中で

スポンジ製のコップが

ハイライトを吸い乍ら

それを煙の中に消してしまふ

突然 マリリン・モンローから

電話がかかる

「だけアベニスとはねないの」

「Do you understand?」

ガチャ ガチャ ガチャ

マツチ箱に精液とコココーラが

あふれだす

「集団」不定形」第五号目次

竜谷大学斗争の本質とは何か……………象 瀧	2
花園大学斗争の意義……………井 上 未知夫	6
ニヒリズムのすすめ(4)……………速 見 吾 郎	9
投稿 自由連合と民俗学への序……………江 口 久 雄	15
詩 転化(暗から闇或いは死化又は霊化)	
風景論其二 マナコ旅行譚(抄)……………北 山 双 劍	17
詩 最後の冷たさ……………堀 本 吟	18
詩 そのときと同じ人間なのに……………無 方 空 美	19
小説 見つけられる矢にさらされて……………嶺 梨 求 然	20
花の皮膚をした蝶の女……………生 島 俊 二	21
詩 仮面の儀式……………里 見 謙 作	30
9・23集会に現われたARFの本質について……………小 三 木 報 淑	31
地底のうた(1) — 労働放浪監獄より(抄) —	
作者 後 藤 謙 太郎	37
再録者 成 岡 甫	37
立命館大学二部斗争史(1)……………秋 月 長 隆 彦	40
— 「平和と民主主義よりよき学園生活」路線から	
「大学解体」まで —	
編集後記……………	58

(表紙は五木武利)

一九六九年の京都は、私が心に重い情欲を育て爆発寸前まで温められつつあるときに往く場所であるにふさわしく、よく闘い、その記憶は現在に至ってもなお、路傍にある種の華かさを添えている。もし今日の日本の首都で革命や反革命が勝利しても、京都はそれに敏感な反応を示しながらも最終的には首都ののぼす秩序を出しぬき、極左をとるか極右をとるかはその時の京都の利害に依るとしても首都とは異質の秩序又は反秩序を放すだろう。人々はだから京都の無表情を信じてはならぬがその過激さを信じてもよい。更らに、その過激さが安定を欲する生活者の勤勉と表裏であることを見抜けばよい。一九七〇年をむかえて私が確信することは、京都こそはよく闘いうる場所であるとともに華麗に面白く闘いうる場所であると。京都の苛酷な形式性は、実は奇妙に変容可能な不定形な思想を誘発する。

(堀本吟)

「全共斗」とは実にシンボリックな、幻想的な記号であって、「バルタイ」という名辭の組織幻想が惹きつけているものよりも領域としては広く深いのである。我々の印象には、一つの斗争を丸ごとかかえその為には潔きよく崩壊できる組織形態は或いは可能ではないのか、ということでありその意味で「全共斗」は「バルタイ」よりも現代的な神話に思える。だから真に組織幻想と対決するなら「全共斗」の原型を抽出し「全共斗」にわけ入ってゆくことは不可欠の作業なのである。その一つの発端として昨年の京都の宗教系大学の全共斗の総括を提供したい。彼らの問題意識は、日常生活倫理の統率者である宗教の問題を抱えてしまふという、未踏の精神領域に到達している。しかもなお、宗教の権力とのゆ着に遡及する者自体が、日常生活の奇妙な精神主義と複雑な政治的発想に足をとられてしまふ困難性は如何に克服されるか。竜大、花大の斗争報告に対する諸氏の感想を寄せられたい。

(編集部)

竜谷大学闘争の本質とは何か

象 潟 蕉

六月十四日の深草学舎十三号館バリケード封鎖によって切り拓かれた竜大闘争は、一昨年より渦を巻き続けてきた新左翼戦線の闘いを竜谷大学の地平に埋めるべくして展開された。「周辺」ということばをそのままもってきて、ピタリゆく竜大の風土は、実に、あらゆる形でおくられていた。

戦前において、对本願寺四十日間ストライキ闘争を貫徹したという神話をもつ竜大の風土は、幾つかの突出した闘いを歴史に記すのみで、一切の継続と土着化

はなされず、右翼学生服支配のもとで、数々のリンチの傷跡を残していた。

反レッド・バージュ闘争、破防法闘争、安保闘争等が、竜大において組織され、闘われた。それは、全国の学生運動においても、いささかも遅れをとるものではなかったが、それらの闘いの以後の課題が設定されえず、ズルズルと、右翼秩序体制下にひきこまれた。突出した闘いが、全国的政治課題と呼応し、一定の闘いを組みうる状況を持ちつつ、それが、継続性を持ちえず、

次の闘いまでの寒さに耐え、あるいは、竜大の基盤を放棄していくという形態が、竜大を主たる闘争過程であったという、桎梏そのものが、10・8以来竜大を基盤として闘う主体に問いつめられていたのであった。

一方、竜谷大学は、その三三〇年の伝統を自負しつつ、本願寺宗門立大学としての機能を果しつつ今日に到っている。だが、その内実は、例えば、戦前における、野々村教授追放事件にみられる、本願寺批判者に対する徹底した弾圧としてあり、戦後においては、観山教授追放事件を生んでいった。昭和三十五年以後、経済、経営、法学部を増設することによって、文学部を中心とする、本願寺エビゴーン路線前近代派と、経済、経営学部の近代派と、法学部の日共路線という三つの同時錯綜の状況が作られたのである。本願寺宗門立大学としての位置を、近代化として再編し、竜大総体を、より一層整備した構造のもとに編成しなおすことが、本願寺と竜大の関係強化を意図する方向として胎動していた。本願寺エビゴーン路線では既に何らの再編はできず、何らかの再編を形成する方向の必要性が、戦後二十余年の状況から現出しつつあったのである。それは、まず、本願寺内部における、日共僧侶による、教団革新運動、平和運動として始められ、平和と民主主義を基調とする運動が、党中央集権制のもとで、何ら一切の地平を切り拓きえず、党員僧侶の

党追隨に帰す間に、矛盾は増大再生産され、その桎梏が、竜大における三つともえの状況に反映されたのである。

竜大のもつ状況がこうした、前近代派と近代派との錯綜を生みつつ、右翼学園秩序支配と制度的渋滞を持ちつつ、全国学園闘争の激動から始まる、竜大闘争への進展が計られたのである。

昨年における、民青派の自治会結成運動の停滞を継いで、全共闘準備会は、まず、大学治安立法粉砕の闘いを学内版治安法撤廃を要求する方向において提起した。竜大内に入りこめくあらゆる不満を、そうした形において、六項目要求(学則、寮則、経理公開、学長公選、学館自主管理、私大連路線拒否)として提起、民青の何でも要求を敢然と排除した。だが、竜大当局は、この要求に対し、十二項目提案を出し、学園改革案の方向を示し、この機会を敏速に対応した。それは、大学側における三つの路線が、いづれも、改革という形で意志一致していることを示すだけで、三つの路線は、われわれの闘いの進展によって、明確に三分解し、それぞれへのゲモノ争いの様相を示していった。

六月十四日のバリケード闘争は、竜大斗争の始点として位置を獲得するものとしてあった。六月十四日以前における学内の様々な桎梏を一挙に、流動化させ、更なるカオスの創出によって、周辺地竜大を徹底的に

分解させ、問題の本質を流動のなから深化させるものとして存在した。それは、長年山積された問題をパリストによって切り拓く意義とは異なり、パリストによって問題を切開いてゆくという形態を提出した。

六月十四日以後、学園の隅々で改革が鳴き出したが、改革の鳴き声は、鳴き声でしかなく、改革の範囲を脱けえなかつた。三三〇年の伝統の重みは、果しなく重かつたのである。われわれは、次なる課題を、法学部日共路線立命館民主主義導入粉砕と設定し、法学部館15号館を封鎖した、だが、民青による実力封鎖解除に退き、夏季休暇を迎えた。

しかし、九月以降、全共闘の闘いは、坂本学長代行による改革試案(坂本試案)と本願寺太田総長発言によって一歩本質に近づいた。坂本試案による、「学長の絶対条件としての僧籍を問わない」とする案と、太田発言の「竜大は宗門立大学であるから学長の僧籍は絶対条件である」とすることによって、本願寺の大学への発言の顕在化をみ、その介入をみることに、問題は、本願寺が竜大の桎梏的存在であるものとして、われわれに、本願寺宗教権力打倒の闘いを喚起せしめたのである。本願寺と竜大との圧力関係は、最近において表面化することが少なかっただけに、この太田発言は、一挙に、竜大総体を揺るがじ、「敵は本願寺にあり」とまで叫ばれたのである。

をもつて加える強制力としてではなく、暴力装置を媒介とせずして、行使する現実性をわれわれの前に突き出したのである。パリケード闘争の貫徹を骨格としつつも、われわれの闘いは、権力構造総体に対する闘いへと進化する方向性を提起した。権力構造総体に対する闘いとは、竜大闘争の位置が、国家権力との対決によって切り拓かれる地平としてではなく、学園闘争の深化をそれ自体に、本願寺宗教権力との対決という地平をわれわれに示した過程によって切り拓くべき位置をもつものとしてある。

十一月十一日、機動隊による強制捜査を経て、体育局を中心とする勢力によってパリケードが解除され、十余名の学友を窃盗罪という汚名を帰せることになって奪いさつた。機動隊の強制捜査1窃盗罪による逮捕1体育局による封鎖解除という過程は、権力が一体となつてかけてきた攻撃であり、われわれが如何に権力構造総体に対して十分に闘いを組み立てていないかを如実に示すものであった。

十一月十六日佐藤訪米阻止闘争を、京大全共闘、立命大全共闘との共闘によって組織したわれわれは、この決定的なゼロへの回帰へと押しこんだ弾圧体制を課し続け、十一月以降の学園闘争を開始しなければならぬのである。それは、大学治安立法粉砕から始つたわれわれの闘いにとって、極めて困難な状況を提示し

九月十二日、全共闘を先頭とする二千余の隊列が西本願寺に向い、怒りのデモを展開した。しかし、問題はそれだけではすまされなかつた。まさに、全共闘は、大乘主義学生同盟のアップビルに応え、本願寺三百数十年の歴史を破る御影堂突入を闘つたのである。

一切の桎梏と怒濤の歴史を開始する闘いは、土足で聖域に突入し、われわれの集会を勝ちとるものとして設定しなければならぬのである。われわれは、本願寺の番兵たちによって御影堂内の集会を貫徹しえなかつたが、本願寺史の汚辱の歴史に土足の刃を突き刺し、本願寺をわれわれの前にたたき出したのである。

しかし、本願寺宗教権力は、土足の刃による傷を宗教権力の行使によってつぐない、門徒衆の護教意識を巧妙に利用し、汚れた裏面工作者へと暗躍し、宗教権力の本質を懐柔のなかに暴露していったのである。九月十二日を終了状況に對して、全国門徒の結集をよびかける一方、非常体制をひき、火災ビンによる「武装訓練」を行なうに到つたのである。この本願寺の震撼こそ、本願寺権力の最も本質的な矛盾を示し、本願寺神話崩壊の前夜を自ら形成したのである。

われわれの闘いは、更に、九月二十二日深草学舎全学パリケード封鎖闘争として進展したにもかかわらず、われわれの闘いは、本願寺大学当局の権力行使懐柔体制のもとに形成されようとした。権力が、暴力装置

ているにもかかわらず、大学治安法粉砕闘争が竜大闘争へと展開したこの六か月闘いは未だ一切勝ちとるべきものも有してはいないし、竜大総体と本願寺に対する闘いはその出発点を確認しているに過ぎない。全国学園闘争が大学治安法の成立以後、機動隊導入のもとで崩れた後、われわれの準備する闘いは、闘いの一層の

竜大闘争に対する支援とカンパのお願い

十一月十一日の我が竜大における機動隊の強制捜査は明確に十一月斗争の予防弾圧として見られるだろう。そしてこの日不当逮捕された十二名の学友中吉本政之君が窃盗罪として起訴された。しかし、彼が一月下旬に法廷で裁かれるのは窃盗という罪ではなく、我々の斗争そのものなのだ。それは普通窃盗罪の保釈金が五万円前後であるのに彼の場合十五万円という莫大な額がかけられたのを見て権力の意図がうかがえるだろう。

故に我々は一月の公判においても窃盗罪ものとして裁かれる竜大斗争の本質を法廷という戦いの場で堂々と主張してゆくつもりである。

全国の全ての学友諸君、労働者、市民の皆さん。これから斗われる裁判斗争に対する絶大な支援と保釈金のカンパを訴えます。

竜谷大学全学共闘会議救討部
カンパの宛先 京都市右京区花園木辻北町一
花大新聞社内 集団不定形 気付
或いは郵便振替 京都八六二二番 京都アナ研

継続化であり、この闘いを一切分断することなく竜大闘争の永続的な土着化が課題となるだろう。

その更なる出発にむけて、われわれは、竜大闘争を竜大闘争として闘いぬくことのみを追及しなればならない。それは、まさに、竜大生としての自己確認に他ならない。如何なる情況の到来があろうとも、われわれの闘う基盤は竜大に存在し、われわれは竜大生である。この確認こそ、次なる七十年代闘争の設定すべき課題としてあり、竜大闘争の一層の激化、発展が展望されるだろう。

(了)

花園大学斗争の意義

井上 未知夫

我々が九月から、とりわけ目的意識的に斗ってきたものは一体何であったのだろうか。そして連日の大衆団交において問われてきたものは何であったのだろうか。

この問いに答える事こそ、これからの我々の行動を決定し、そして更には今後の指標を示すことができるのではないかと思われる。

「商品学問」が告発され、産学共同路線の大学がそ

※ 野々村教授の「浄土教批判」に対して行なった本願寺と本願寺派教授らによる追放事件（大正十二年）

※※ GHQの指令による戦犯追放審問竜大委員会委員長観山雪州教授に対して、本願寺が当委員会の公金横領をデッチ上げ観山教授を追放した事件（昭和二十四年）

※ 竜大斗争について更に詳しく知りたい方は「辺境」一号所載の「近藤論文」を読みたい。

の根底から存在を問われはじめた時国家権力にあっての恐怖は絶大なるものであったに相違ない。防衛法案と併せて、中教審の答申を一はやくまとめて大学立法をデッチ上げたのはまた我々の記憶の新しいところである。

そして特記しておかねばならない事は、すでに大学には自治はなかつたのである。自治を守るというスローガンは全くのデタラメであった。だから我々は自治

を創らねばならなかつたのだ。我々の総意（こんな言葉があるならば）はこの自治を創るという一句に集約

できたのではないかといえる。そして学内の権力関係を打破する事に我々のスローガンはしばられた。そして敗北に帰した。我々は我々自身に敗北したのである。我々の意識がラジカルならばラジカルなだけ敗北は必然であったのだ。しかし我々は敗北ある斗争をせざるはいられなかつたのだ。敗北する斗争こそ真に矛盾を告発していく唯一の方法であつたからだ。我々が教育体制を云々する事は、己の学生としての地位（特権階級）をも否定していく事であつた。そんな事は百も承知であつた。しかし語らずにはおられなかつたのである。十一月十一日には国家権力の手先である官憲の乱入を余義なくされた。そして、その日から大学人は個個の存在について、かゆいほどに身じろぎを始めたのだ。

それに前後して、自称革命戦士は街頭斗争に実存をかけて政治斗争の真つただちに出て行ったきり帰つてこない。それは、さながら全共斗運動の昂揚と終焉を短時間で燃焼させた花園版のようでもあつた。三ヶ月にもわたる斗争のあと、何もなかつたかの様に授業が平然として行なわれている現在、もはや悪夢としか把握えようのない今日の時点で我々は総括を試みる必要を感じる。

(一) 宗門とのかかわりについて

我々は過去、妙心寺教団とのいかがわしい関係について明確なる理論をうちたててきた事なしに生きていた。はたして妙心寺教団とは一体何であり、花園大学とは妙心寺教団の何であつたのだろうか。当の筆者にも今た解からない。ただ妙心寺教団が花園大学の経営母体であり、教団理事が花園大学の理事をも兼ねている、又花園大学の単位を取得すれば妙心寺派の教師資格が授与されるという事実を知っているにすぎない。

現在宗教団体とは一体どのように社会に関与しているのだろうか。この方の答えは明確である。各末寺の総括と、サーピス業（葬式業）としての中央本社である。では何故にこの本社が大学を構えなくてはならないのか。そんな必然性は全くない。あるはずがないのである。しいてこじつければ大学に「サーピス業専攻科」を設けなくてはなるまい。筆者は妙心寺と花園大学のいかがわしい関係を断ち切ろうと論を進めているのではない。誤解のないように言うならば我々の志向している禅をあたかも以前から保持していたのだと表看板を出しているサーピス業本社（くらしみをこめて）を『志向スローガン横領罪』で告発し不潔な本社、末寺、人民大衆の関係を何ら宗教とは縁もゆかりもないものだといいたいだけの話である。すでに本山安泰のありし良き日は古えのことであつたのだ。

(一) 教育体制について

教育とは文化伝達の手段であると言われ、ここで「文化」と呼ばれるものは、ある一定の規模をもつ集団、社会で共有されている行動様式あるいはそれを規定する諸要因(価値観・思想等々)を意味しており、それらの伝達が「教育」によって行なわれているのは事実である。しかしこの文化伝達は、水が高きから低きに流れるが如くスムーズに行なわれるものではない。教育者が被教育者に対して何らかのものを伝達しようとする時、それを可能にするには常に教育者に何らかの権限(又は権威)が保障されていないければならない。このような権限に裏付けされた文化伝達の関係こそ「教育」と呼ばれるものである。従って「教育の問題」とはまさしくこの「関係のあり方」の問題であり、それを保障する「権限の問題」であり、それを支えている人間(教育者・被教育者)の思想性の問題である。そして我々はこのような意味で「教育」と呼ばれる「関係」の中で貫徹している資本の論理を問題にしなくてはならないし、我々が否定してきたものもこの「関係」における非学問性であったのだ。花園大学の場合、我々のラジカルな問題追求と闘争によって、非学問的な出席制度、学生心得等が撤廃された。しかし真に撤廃されなくてはならないのは、我々の中に内在する非学問的な意識である。体制がい

くら変わるうとも、我々一人一人の意識が変革されなくては何の為の体制変革であるのかわからなくなるであらう。我々の闘争は理実を踏まれた未来の社会を目指すものである。資本主義に従属する現大学は当然解体されそして新たに全人民に解放されたものと生まれかわらなければならぬ。それは体制変革のみによって可能となるのでは毛頭ない。全人民の意識が変革されねばならない。つまり政治斗争も人民の意識に裏付けされてこそ意義があるのであり、我々はその為の準備を今からしなくてはならない。文化秩序伝達の機能を最も強力に握っているところの大学の闘争は、まさにその意味で文化革命と同等の質を持ちえていると言える。そしてそれを担う主体こそ我々であらねばならない。

底辺からのエネルギーの隆起が、いたるところであってこそ我々の闘争を勝利に導くであろうし、人間変革も社会変革も押し進めて人類解放を可能ならしめるものだと確信したい。

以上花大斗争とりわけ九月以降の論点を筆者が独自にまとめてみたが、決して我々の支持が絶大であるなどという夢をみてはならない。むしろ少数派である事実を冷静に見つめなげ敗北を余儀なくされたかを真剣に問いつめてみる必要性を感じている。

(十二月十三日)

ニヒリズムのすすめ

(4)

速見吾郎

第二章 外来思想としてのニヒリズム(その3)

本誌第四号に(その2)として、ニーチェの「宇宙論、的諸価値の没落」を紹介してきた。つまり今までは、ニーチェの哲学(ニヒリズム)の三大バックボーンの二つとして、「権力への意志」即ちニヒリズムの自己超克、「超人」即ち、その意志そのものの象徴であることを記してきた。我々はここで彼の今一つのバックボーンとして、「永遠回帰」をとり上げねばならないであろう。それは彼自身が著書「権力への意志」の中で、「意味も目標もなく、がまた終局もなしに無のなかへと不可避的に回帰してくる、そのあるがままの生存。即ち、「永遠回帰」。これこそはニヒリズムの極限形式である。即ち無が永遠に」(傍点筆者註)以下同様と書いている。しかもその「回帰」ということ自体は一体何であるかと云えば「回帰の教えは歴史の転回点である。」(同書)とニーチェは考えたのである。彼の「永遠回帰」説は、前掲傍点の「……不可避的に回帰……あるがままの生存」云々によって明らかのように、一つには永遠的な自己の体験であるのと、更に一つは「わたくしが回帰を創造した瞬間は不滅である。この瞬間の故に、私は回帰に堪える」(ニーチェの遺稿から)の瞬間性である、ということである。ここで彼、ニーチェ氏の「永遠回帰」説を簡単に説明して彼のニヒリズムを一応終りたい。

即ち、あらゆる事柄や事物、もろもろの出来事は、同一の姿・形で同じ順序を保ち、同じ連鎖をもって永遠に繰り返し現れる。同一のものが永遠に循環する生の世界は、「底のない意志の戯れ」であり、そこに絶対肯定なる生の快楽がある。「快はかくも豊かであると故に苦痛を求めて渴する。……すべて快はそれ自身を欲する。故に又それは心の苦悩を欲するのである。……快は全ゆるものの永遠性を欲する。深い深い永遠性を欲する。」そこには、ニーチェの神を否定した無神世界におけるディオニソスの肯定の永遠の生が見い出され

るのである。それは「運命愛」である。その「瞬間」をニーチェはかくの如く云う。「もし我々が、ただ一つの瞬間に対してだけでも、そのとよりノと云うならばそれによって我々は、我々自身に対してのみならず、全ての現存在に対しても、そのとよりノと云ったのである。何故ならば、それだけで孤立しているものは、我々自身のうちにも事物のうちにも何一つとしてないからである。さればもし、私の魂がただの一度なりと幸福のあまり絃の如く打ち震え響きを立てるなら、このただ一つの出来事を条件づける為には全永遠が必要だったのであり、そして全永遠はまた、我々が、そのとよりノと云うこのただ一つの瞬間において裁可され、救済され、是認され、肯定されていたのである。」(権力への意志)この考え方は、ニーチェ自身が「ニヒリズムの究極的形式」と呼ぶように存在の虚無を表現する一つの定式ということが出来得よう。(存在の虚無については、第一章、現代におけるニヒリズムの意義、を参照せられよ)もちろん「永遠回帰」は存在(または実存)の表現形式だけではなく、快樂の生の肯定ニ運命愛として、人間の生存方式の一つのバターンとして彼は考察したのである。かみくだいて述べるならば、現実存在の自分自身の生と行動が過去から未来へ永遠に反復し、循環し出現することを悦び自分自身のものとまたするようになり、なるように生きよ、行動せよという願いを込め、現在のこの瞬間がベターであるならば、これを永遠性にまで高めたいし、又そうなれば今度はこれを無限回に循環したいと望むはずである。そしてその時に「永遠回帰」の意味は、同一の循環を示すばかりではなく文字通りの「永遠」の「回帰」への強い要求願望をあらわすものとなるのである。

「外来思想としてのニヒリズム」の典型的なものとして、ニーチェの哲学を断片的にはあるが取り上げてきたのだが、それはニーチェが十九世紀ヨーロッパ境界文明の落し子であり、それ故にヨーロッパニヒリズムと決したのである。がしかし彼の超人思想は、神の權威に対する信仰の、その神の代わり超人を置き換えたものである。ニーチェは限界的パンク寸前のヨーロッパ文明から目を転じて、古代インド文明のその思想に大変なる影響を受けているし、また讚美しているのである。(バラモン教→マヌ法典)が、如可んせん、彼の理解能力よりはるかに超えたところの仏陀の思想を知るところとなさずに古代貴族主義を回顧するあまり、仏教の「空・無・中観・密教」といったニヒリズムの生の高揚・充実を見ることが出来なかつた。もしも彼、ニーチェ氏が認識し得ていたならば、彼の積極的能動的ニヒリズムはもっと高められていたに相違ないと思われるのであるが……。

以上で第二章は一応終るが、シュテイルナーとニーチェだけをとり上げて外来思想におけるニヒリズムがこれだ、とするつもりはさらさらない。何故ならば、古代はソクラテスからキリストや、キルケゴール、ハイデッガー等々、近代から現代に至ってはサルトルの実存主義等も含まれるからである。しかしながら本稿はニヒリズムの単なる紹介である故に、彼らのうち最も典型的かつ知名度の高いシュテイルナー氏とニーチェ氏に御登場願ったのである。従って彼ら二人がヨーロッパニヒリズムではなく、ヨーロッパニヒリズムのうちの二人なのだといふことを新ためて認識されたい。

第三章 仏教におけるニヒリズム(その一)

さて、賢明なる吾が読者諸君は、第二章までで、ニヒリズム云々について、多少なりとも理解せられたと拝察する。従ってここではあらためてそれらを総括・要約する考えはない。ただ本稿の序章、第一章で述べた如く、これまで紹介してきたのは西洋的発想法としてのニヒリズムの存在論・価値論であって、あくまでも19世紀の限界的欧州文明の所産としての毛唐的思想であり白色人種の思潮である。ということである。ニーチェもキルケゴールも共に仏教思想に目を向けて研究したが、所詮彼らの理解度はキリスト教的体質につきこんだ思考方法でもって、仏教に対応するが故に、即ち異質の思想という一線を無意識的にも画するが故に、仏教ニヒリズムを消極的・頹廢的・現状維持の体制肯定思想としか捉えることができなかった。両者の相違点をここで明らかにすることは、本稿の目的ではないので又の機会にゆずるとして、私は本章においては、ニヒリズムの要素を多分に含んでいる仏教理論、特にナーガルジュナ(竜樹)の中観論を中心として述べたい。がしかし、吾が賢明なる読者諸氏以外における、類い稀れなる無知の愛読者氏のためにも、「仏教」そのものの解説から記していきたいと思う。ところがなにごと文獻ニ教典、(解説・入門・注釈まで含めず)だけでも膨大なる数量にのぼる仏教をそのまま諸氏に紹介することは、私自身の力量からも極めて困難である。よって次の項目順序によって稿を重ねていきたいと考える。なお、執筆途中において心ならずも変更があるかも知れないことをお断わりしておく。

(A) 仏教とは一体何か?

- (B) 仏陀(シャーカーカムニ・釈尊・ゴータマ・シッダルタ等々)の伝記
- (C) 仏陀の教え — 原始仏教について、
- (D) 大乘派とは何か
- (E) 中観論・密教・禪
- (F) 浄土門・日蓮主義
- (G) 現代における仏教の意義

(A) 仏教とは一体何か?

イタリア・イギリス・北欧等を世人はキリスト教国と呼び、タイ・ビルマ・セイロン等々を仏教国、サウジアラビア・ヨルダン・トルコ・イラン等々を回教国と呼ぶ。そして、ロシア・中国・東欧・北鮮等々を我々はM・Lスターリン教国と呼ぶ。しかるに我が大日本国は、神道(しんとう)国とも仏教国とも云わぬ。ましてやキリスト教国とは毛頭思ひもよらぬ。ブルジョアの(プロレタリア的ともいふ)見地から云わしむれば、大日本国は古今東西のあらゆる思想が集まっているさながら万国博のような国であるらしい。また宗教(嚴格に云えば、思想と宗教の区別はない。この単語そのものについては後述する)も然り。仏教、キリスト教、ユダヤ教、回教は云うに及ばず、道教・儒教・ヒンズー教・ゾロアスター教・マルクス教・反日教(=反日共!!)、未開地域原住民の部族宗教らの多神、一神、無神の殆んどの宗教が集まっている。

そしてそのうち最大多数の支持者(信仰者)を得て、巷には「犬も歩けば寺にあたる」と評される仏教は、我が国民に一応定着していると思われる。しかしながら現代日本の老若男女を問わず殆んどの間人は、仏教とは葬式時にお目にかかる抹香臭いもの、あるいは文観都市における前世紀的遺物である墮落仏教を見せつけられ、教育された、が故に、仏教の思想そのものについてもまったく無知である。それは、何も我々いわずゆる俗世間の人間だけではない。いやしくも坊主・僧侶と名のつく人間共の不勉強・不誠実・体制内保守主義・利己主義・拝金主義等々の体質による職業仏教徒内部からの腐敗・墮落・頹廢等々による責任の方がより重いのである。例を上げると、詳しくは、本誌第四号の穆谷介氏の論文「現代宗教教団を告発する」を参照すれば少しは納得がいくかと思う。それでは日本は少くとも中世以前は仏教国だったのか? それとも神道国であったのか? とともにせう

ではない。

元来が海外よりの日本への侵略民族である天孫降臨民族(大和民族)天皇一派は、人民支配の道具として積極的に仏教を輸入した。(飛鳥・天平の歴史を勉強せよ)しかし、仏教を国教に制定したことは一度もなく(それは国立戒壇が今日に至るまで設置せられなかったことにより明白でもある)また神道も皇大神宮を初め諸々の神宮大社があつても、体系的緻密な教義理論はなく、天皇を拝礼してもそれは「上からの宗教」であつて、毛唐国の如き「下からの宗教」ではなかった。

仏教はその名の示す如く、「仏陀の教え」であるが、「宗教」なのである。我々が簡単に宗教と呼んでいるもの、それが即ち仏教そのものことなのである。先述したように「宗教」の字義解釈から稿を進めよう。この単語は承知のように元来が中国語である。従つて時代と仏教理論の体系化を経るなかで解釈がまちまちとなる。即ち、宗の教旨、宗即ち教、宗と教の並称、後代には宗の教(入宗は教の内容表示の要点・教は宗を詮表する文字や言説という意味)(例えば、浄土門の法然の教義など)よつて宗教とは仏教のことを指すわけであるが、明治期以後、英語研究の時、religionを宗教と訳したが、religionイコール宗教としてしまふのは、無理なのである。和訳として無理があるというのはいふことかと云えば、欧米人は殆んどreligionの語源の一つである「結ぶ」という意味に理解している。それは、神と人とが結合する意味なのである。従つてreligionは、元来キリスト教を初めとする対神信仰により発しているのであつて、神仏と人間の結合・交流を説いていない仏教にそのままではめることは、仏教思想を日本共産党員(即ちマルクス・レーニン主義党(者)とみるのと同じ誤りをおかすことを、吾が賢明なる読者諸氏は肝に銘じておくことが肝要である。

さて前書きが長くなつたが、宗教である仏教であるが、大要してそのイズムとは次のような巾広いものである。即ち、平和主義・人道主義・人間主義・同朋主義・非教権主義とつけ加えるならば相対主義の等々であるが、「人間」をあくまでも主眼にすえ主体にした積極的能動的活動的な現状改革的な思想、それが仏教なのである。次に、「仏陀の教え」とは如何なる意味をもつか。即ち仏教とは何か、「教え」の内容とは概要どんなものか、を考へてみよう。それには先ず「仏陀」の意味から説明せねばならない。それは第1に、シャーカーカムニ(釈迦牟尼)の称号である。シャーカーカとは当時のインドの一部族の名称であり、ムニとは尊者、聖者の意味である。よつてシャーカーカムニは「釈迦族の尊者」のことである。我々がゴータマ・シッダルタのことを釈迦と云うのは當を得

ていない。(強いて言ひならば「釈尊」と云うべきであろう。)しかしながら、「仏陀」は「シャーカーカムニ」(ゴータマ・シッダルタ)とは限らないのである。シャーカーカムニは仏陀に違ひはないのであるけれども、仏陀はシャーカーカムニ一人だけではないのである。というのは、シャーカーカムニ以前にもまた當時にも「仏陀」という単語は存していたからである。それは弥勒信仰にても明らかであろう。弥勒(マイトレーヤ)が「仏陀」になるといふ、いわゆる「過去仏」が存在していたことよりわかる如く、固有代名詞ではなく、しかも複数なのである。「仏陀」とは梵語(サンスクリット語)で「めざまた」という過去分詞であり、その意味は「真理を得悟した者」である。第2には後の大衆部派(後世の大乗派の源流)の説では、人間はタレでも「仏陀」に成り得る能力・要素を所持しているとして、シャーカーカムニは積年の努力の修行・研鑽の結果、「仏陀」になったのである。故にシャーカーカムニと同様に努力すればタレでも「仏陀」に成れるし、そうなるに違ひない。という。よって仏教とは、第1説の「仏陀」によって説かれた仏陀を開祖とする宗教」という意味と、第2の説は「仏陀になるためのその方法・道法(ダルマ、通常の法概念とは異なる)を教え、研鑽する宗教」の意味とが明確になるわけである。更に第3説として複数の仏陀を考へるときには「仏陀への信仰・帰依を説く宗教」として表現せられる。また汎仏論(後述・宇宙||真理||仏陀)に立脚すれば、「仏教とは宇宙||真理||仏陀という世界觀の表明」に他ならない。というこれが第4説である。汎仏論が神秘的色彩を濃くすれば密教となり、第5説「即身成仏を説く宗教」が浮かび上がる。第6番目の説としては、浄土門として広く日本国内に広宣流布された他力本願の思想がある。即ち「仏陀による人間の救済としての宗教」である。

いずれにしても、単に「仏教」という言葉一つとってみてもこのように多種多様な意味内容があり、しかも各々が理論的研究として到達した解釈なのである。しかし、私が諸氏に紹介したいと思ふ仏教は、全て根本は「仏陀の教え」から出てきている原始仏教と、それを肯定的理論的に発展させた大乗仏教の中核をなす中観論である。従って本稿を読み進むことによって仏教ニヒリズムに到達するわけである。

以上のように「仏教とは一体何か」を簡便に述べてきたが、その把握によって「仏陀の仏教」が「我々の内なる仏教」へと積極的・活動的・能動的ニヒリズムとして、現代をして未来に展望を見い出せるものと成り得るのである。よく心すべきであらう。

— 未完 —

投稿

自由連合と民俗学への序

江口久雄

まず試みに、おのれの嘗んできた行動半径の枠からとび出してみたい。同じ言語を話しながらも、もの考え方をはじめ、価値観や美的感覚、それにその人特有のムードなど、おのれと著しく異なる人々が、生活していることに些少なりとも驚きを禁じ得ぬだろう。その驚きが大きければ大きいほど、極端な場合は、ある日本人が、ロンドンの街とイギリス人たちの織りなす生活に、とことんまでいや氣を感じたように、反発するかそれともまた、あるフランス人が、イスタンブールの街とトルコ人たちが営む暮らしに、激しく魅きつけられたように、同化せずにはおれない。

民俗学の対象は、時には日本人をしてかくまで嫌悪せしめ、また逆に、一フランス人をして限りなく愛着せしめる力をもった「或るもの」である。その「もの」とは何か。それは、端的にいえば、地域差をもった人間性からわれ、とでもいえるようか。とはいってもそれは無形のものである。衣服の様式とか祭の形態などといった有形なものを、その存在の主張としてい

る所の、より根強く深い無形である。

民族学は、その有形を通じてその存在を知り、さらに無形を追求して人間性の根源深く迫る学問といえよう。

日本人が古くより首を守ってきたもの、それは何かといえ、大和朝廷成立以来、今日に至るまで権力の下になお生きつづける古き生命であった。それを素朴な子供の遊びや、地方の人々の行事の中に発見して驚いたのが、柳田国男である。そして彼は、その衝撃によって新しい未知の学問の創始に一生を費したのであった。そうして日本における民俗学の根がしっかりとおろされたのである。当然、それがために、我が国現今の民俗学は、柳田国男的偏向が認められるだろうが、それが学問として確固たるものとして完成に向うとき、民俗学の本来の性格が強生ききてくるだろうと思う。それについては後述することにして、ともかく、柳田国男が、学問にまで高めて研究しようとした「古き生命」は、決して古いだけではなく、現に、わが国のある地方で、古来より権力に窒息させられることなく、また、時代に腐蝕されることなく生きつづけてきた「もの」として、今また、新しい青年の血にうけつがれつつあるのだ。

では、なぜ、その無形の「もの」が、かくも強靱な生命力を、その平凡な素顔の中に秘めているのだろう

か。それは他ならぬ人間たちが、遠い昔に、近い昔に、その手で創造したものであり、そして、まるで草や木に、水や養分や日光を与えるように、我々人間たちが、代々、その素朴な感情をふんだんに注入して育ててきたからである。その結果、たとえば、体制を共にしながらも、農村の人たちは、何と明朗に、しかも根強く生きていく人の多いことだろう。その彼らの限らない健康を、政治的無知として片づけられるのはあまりにもたやすい。だからそれゆえあまりにも、人間存在の重々しい尊さから浮きあがってしまふことになる。安直な政治思想による生活感情への否定は排除されねばならない。そして、そのみぞを埋めるものとして民俗学的方法を發展せしめねばならない。なぜなら、彼らの生活感情は、幾世代もの権力の暴圧に耐えてきた生命力があるからだ。我々の祖先は、その意識するとせざるにわらず、尊い無形の「もの」を、その最初の地域的・原始的な共同体の営みによる、人間の歓喜とともに創造し、或るものは、天平・白鳳の面影を香らせ、また或るものは戦国の雄健さを残しつつ今に至るまで生かしつづけてきたのである。

我々民衆の無形の力を軽視してよいはずはない。それどころか、民俗学の性格をつきつめていけば本質的に、人間主義、いいかえれば、アナルシーになるのではないか。このことは、我が国の民俗学の成長と共に明らかになるだろうし、少なくとも、この民俗学のアナルシーな性格を自由に育てつつ民俗学の成長をはかっていくことこそ、あるべき民俗学者であり、またアナルシストであると思う。

そうして、我々が自由連合社会を構想するとき、権力社会が一貫して行なってきた大衆操作的マスコミに代わって、マスコミの変質化が問題にされねばならず、そしてそれ以上に、民俗学が対象としてつづつあるところの無定型の人間集団の存在と、そのミニコミを大いに問題とせねばならない。

最後に、「祇園祭」という映画を御覧になっただろうか。この映画に対する批評はともかく、現実に各地方で、いろんな無形の人間性が生きて居り、それが有形的な祭りや、年中行事、または風習などをやることによってその存在を主張している。

我々は、無尽蔵な人間性の追求に、単に哲学や、宗教を用いるのではなく、民俗学的方法で迫るべきではないだろうか。

以上

注※ この題名、なぜ序としたかといえは、僕自身のことからのアナルシズムと民俗学への有機的な勉強を起すため——そのための序としたのです。

転化

(暗から闇或いは死化又は靈化)

北山 双剣

死霊の軌跡は暗への呪文である。彼の生存条件を充たさない集合体は、暗の呪文を点描する。

暗の呪文を唱え讃美を歌う彼は、死霊の仮面をおおひ神々しい血の廓清を注ぎ、個体の一念を生成するのだと、犯し(又は犯され)続けたところに暗の呪文が勃発する。

死霊の軌跡は暗の芸術だ。彼の放つ汁液は集合体へ浴せ鋭敏なSexをなめつくす様に運動する。

復刻版

労働放浪監獄より

— 後藤謙太郎遺稿集 —

申込は京都アナ研まで
振替 京都 8621

¥300 (送料共)

暗の芸術を礼讃しうる者は、既に異端者としての暗の芸術を根絶させる。そこに観るものは死霊の軌跡運動を喚起しないものである。

暗の呪文は古い儀式への壊滅を前提条件としなければならぬ。

……現に死霊の暗の呪文、汁液を浴びせた集合体は、闇の芸術の転化に迫まらされている。と言わなければならぬのだろうか。

部分体は「暗の芸術を礼讃しSexの純化原生的な現象を」「ギリシャ、ルネサンス時代に於ける人間の再現を」と、暗の呪文に唱えた。だが、暗の芸術を礼讃しうる者は異端者群としての軌跡の芸術は根絶されている、不変体基盤上に異端者は存立している……今や20世紀の3分の2を凝視すれば、死霊の暗の呪文・汁液を浴びせた集合体は闇の芸術としての転化であろう。

風景論其二

マナコ旅行譚(抄)

堀本 吟

△とどめのような 今日 呑みくだすとあおい滝になり やわらかなみずたれながし うれしかった マナコ失跡といえども私は大丈夫 小さな集団が小さな平野に移動している そのいちばん後からマナコが短い肢の女機械をひっかかえ、永の旅立ち、おういマナコより さよならさ。

△ついに なぜ はじまったのか 銅羅を合図の大量自殺 おれもおまえも吹きさらしの家屋に入りこんでゆくマナコをみて泣いた。

△一本の腕をなくして

△一本の肢を引きずり

△多くの屍体が軽々とうかぶ広場をかけぬけ

△風が黒いとぐろを巻いている

砂山のような路地に家屋あつまる 綺麗なところで オマエを蝶結びにしたぬめさ。

△他人と唇交接するおそろしいときがこないようにと それでも容赦なし平野はおしゃべりをおくりこんでくる 音声のすべてを含んだ 見取図の白い認識を強いてくる ふてぶてしい風景よ とりついで短い肢バタバタさせる自閉症のマナコはふとっているさ。

△私は言葉を亡霊だと思っている たからおまえを私の肉体が拒めば、私はおまえの肉の中に溜まって、灯りのようなチロチロしたものを吐くだろう マナコより ほんとに言葉は軽いものだ それにすぐドロリと溶けるさ。

△マナコは銀色のお粗そう洩らし 寒い色にいろんなもの降らすのさ 死にかけた銅羅のうえに沈みかけた船のなかに たとえば音のする浮袋なんか 其時マナコは国旗のようにタタマレテ、河床に放り込まれちゃう 可愛相なマナコより

△天より鉛管墜ち 氷瘡は暗渠を深く浸す ふり向けば肢締めつける壁の肉 滅び色の衣裳きた女は屋階を抜けて涙だした花火のように爆裂するよ マナコはひとり迷子なのさ。(つづく)

最後の冷たさ

無方空美

門出は最後の冷たさでした 僕はねむれる予感に凭れ ひをかき やって来た冷たさにふかれ 言葉のなくなるのを考えていた 冷たさを知ってしまっ 少女は老いすぎたはずなのに 生きて居る！

はじめての冷たさに 帰って行く ひとつの僕は 終りの序曲に誘われる 内なる断頭台を 意志の姿勢ではなく 微睡みで了解したのだからか 耽とした言葉を見つける前に 最後の冷たさは少女をとらえた 目送は門出のひとへだった？!

さらに

山鹿さんえの連帯を

今も同志山鹿は全力をあげて死を戦い続けています。生活保護を打ちられるなどのこともありましたが。それでも生き抜いてもらわねばなりません。本当に苦しいのは山鹿さん自身です。私共の想像もおよばぬ勇気で生き抜いている尊厳な姿を想像して下さい。堅忍不拔のアナルシストの輝かしい闘士、エスプレント運動の推進者の生き抜く姿を見て下さい。皆様の暖かい連帯の誠意を多少にかかわらず、左の取扱者に御送り下さいますように願います。

(一一三) 東京都文京区本郷五ノ二八ノ三 伊藤 公子

(二一〇) 川崎市塚越三ノ四七二 綿引 邦農夫

(二八〇) 東京都武蔵野市緑町 二丁目三ノ一ノ四〇一

(振替東京一三三三三〇) 三浦 精一

そのときと同じ人間なのに

嶺 梨 求 然

俺は黄昏の葡萄棚が好きだった。その端の林檎の木の、こんもり盛り上った土の匂いにロマンチストの姿を見ていた。そして粗がらや藁くずの散りばめた布団のような道をいつも好んだ。だからインターの渦も、マドロールの歌もそれから喫茶店のコーヒールもすぐに俺を引きつけた。

俺は音楽会が好きだった。正装した黒い柱が一つの糸によって自在に動く姿をいつまでも見入った。そして寒空を気にもせず口笛をふき両手を振って家に帰っていった。だからジャズも聞き、フォークも歌いそして歌謡曲の流れる甘ったるい粉

の舞う、紫煙の中のカウンターまでもが俺の来るのを待っていた。

— ☆ — ☆ — ☆ — ☆ —

「エピソード」

ある日……そんな言い方をするのはよそう。事実なんだから。弱気にしろ強気にしろ俺のいまこうしているのが俺の力じゃないか。どうなるか知りはないのだから。なぜなのかわかりはしないのだから。たばこをふかして、こうして書いている俺の姿こそ、真実の俺なのだ。仮りに殺されても、それ以上に殺せうとする奴もあるまい。

堀本吟詩集

「冷たい秋の訊ね人」

¥150 (税別) 25)

が自費出版されました。読んで下さる。

申込は京都アナ研まで 振替 京都 8621

小説

見つけられる矢にさらされて 花の皮膚をした 蝶の女

生 島 俊 二

夕暮時、少年はひとつの悪意に満ちた創作を着想している。つい今しがた雨の止んだ空の雲には、輪郭がなく、のっぺりと、それが灰色でない気味の悪い色をしている。誘惑的な薄桃色だった。夕焼けの激しい情念とは違った光の悪意に、人達は路地の泥濘に立ち、上を見ながら、困果応報めいた遠い過去の異変の話をしているだろう。騒がしさも奇妙な色の空に吸い込まれて、そのため、少年は距離をおいて人達を眺める。

見える限り同じ色で、空に陰影はない。色そのものに影がある。寝棺の中に死んだ少年の祖父の薄い唇があった、あの影だろうかと、空と山の境界目は、例えばその寝棺の枠のように、逆に空を囲む縁取りだった。死人のように生きている人達の唇に浮かぶ性の笑いの色。祖父は歯莖を剥き出しに話す人だった。少年は己れの体の輪郭を意識的に感じようと夢中になっている。彼は自分の世界にすべり込む。

少年の悪意には明確な対象があった。少女がいる。彼はその少女を物のように欲しいと思った。彼女には

この中でRという符号で呼ばれる恋人がいる。少年にも名はあるが、彼はその名を煩いと感じている。彼は少年と呼ばれることに喜びを感じる。それ故、わたしはそう呼ぶ事にしただけだ。少女が彼を鬱陶しく思っている事は、少女の全身の表情、あるいは部分として完結した総体である眼が、それこそ不自然に俯いた顔全体から睨み上げたその凝視め方、それらすべてより彼は気付いている。少年は行く先々いたるところで彼女の嫌悪に、棘に、拒絶に打ちのめされる。そして、Rを含めて、これらすべてが少年の創造の具体的な悪意の対象だった。それは最も効果的に書かれねばならなかった。

蒸し暑い風下がり、少年は顔に滲む男の汗に苦しんでいる。彼はもう少年からはみ出しているのだ。Rに声をかけた。

「頼みがあるんだ。誰にも言わないで欲しいんだがなあ」

平生話もした事がないRに、いきなりこう切り出した。学園にはどこにも死角が存在していないように明かしく思えた。Rは外気に触れようと教室の窓を開く。

「頼まれてくれなければ、話は出来ないね」 ありきたりの言葉が、そんな時、それで十分相手の好奇心を刺激する事を、少年は知っている。つけこむよ

うに、

「猫の名前がある。あの女が一番好きだった猫の名前を聞いてくれ給え……創作を書くのにそれがいるのだよ」

少年は相手を喜ぶ形になっていた。道端で不意に男が、思春期に属する少年達に裸の男女の絡まり合う写真を見せ、買わないか……という、その秘密めいた語り口。そのような陰險さが少年の密々声にあった。彼はその陰險さで、それに気付く事によって優位に立っている。

少年は校内で、たびたび創作を発表している。どれも思春期の恋愛について書かれたものだった。

「どんな話なんだ」

Rは釣り込まれた。彼は見られている不安にとらわれている。A俺達が書かれているのだなあ、そう思った。「君は知ってるでしょ」

Rはかろうじて逆襲を試みる。返事は残酷に

「知らない。約束は約束だ。君は守らねばならぬ」

翌日、猫の名前が与えられた。少年の創作には「野辺おくりの歌にかえて——」という名がつけられた。

創作

「野辺おくりの歌にかえて——」

た。醜く少女に向かって笑う。祐次は六才、波留は四才だった。想像はしていたけれど、実際は温度がある。シュンの巨体は彼の膝からはみ出した。猫が、乳汁の母の乳房の匂いのする、はい出しも出来ぬ赤ん坊を窒息させるといった種類の事件はたびたび聞くだろう。波留の猫はいかにもそのような事に相応しい大きさだ。祐次は思った。へまるで寝小便をした時のような暖かさだ。温もりは広がる。祐次の顔は醜く笑ったまま静止し、いつも赤面する面に感じる嫌な予感におそわれた。少し小便を洩したかもしれない。そして、まさしく少年らしく赤面していた。

彼は波留が好きだった。その後、波留を見るたび、彼女の短かいスカートに猫の抜毛を見て、震えていた。

* * *

記憶はいつも濃密だ。オルゴールの音が祐次の意識の内部に指で触れて、箱のような水車小屋をあらゆる方向に造りあげる。

彼は長い間、鳴らなくなった木製の水車小屋の形をしたオルゴールを持っていた。曲はどこか異国の民謡で、箱は完全に密閉されて、内部のぜんまい仕掛けの金属部位は見る事が出来なかった。

或夜、母は明かるいうちに整理した戸棚から、分け

* * *

猫は濡れば体毛が皮膚に貼り付き、その割目より青白い皮膚を見せる。少年というにも幼い祐次は、夏の始め、妙に感じやすくなっている。彼の皮膚は、寝冷でもした腹の、あるいは生の肉片のようにひんやりとし、事実、彼は吹き抜けてゆく寒い予感に身をさらして、幼児特有の緩慢さでじっと猫を見ている。感性が研ぎ澄まされるのが夏だとすれば、それはより多くの皮膚を漂う空気にさらしているためだ。猫は生々しく秘密めいた性だが、滴り落ちる水滴は涼しい優しさのようでもある。遠くの井戸の水音が汗の吹き出る全身を撫でてゆく涼しさをすら感じていた。突然激しい雨が降り出して、寝息をたてていた猫は眼を大きく開いた。雨音の激しさはそのたびに人を驚かすように断続的だった。

祐次は異性を感じた。猫は或、ひらひらと形のいい後ろ姿で歩く少女、波留の持ち物だった。猫の名はシュン。意味はない。ただ「子」と「シ」の間にある不思議な音でそう呼ばれている。

少女を含む優しい風景と化していたシュンはのっそりと立ち上がり、祐次に近づくと、彼は恐しかった。少女が笑って見ている。ほっておいても、おそらく彼の膝ののっただであろくに、きこなく不器用に手をそえ

た古いがらくた物を庭で燃した。夕食の仕度があるのと、

「火を気をつけて見ていなさい」

と祐次に言い付けた。既に火は弱っていた。祐次は鳴らないオルゴールを火の中に入れ、それはやがてくすぶり始めた。ちろちろ夏枯草が燃え、赤く、そしてすぐさま黒い紙のような炭ができ、弱い火はゆっくりとこれら草の間を流れ走り、なかなか消える事がない。オルゴールはもとより淡調な旋律のみだ。西部劇の野営のいいしれぬ淋しさ、火の中から不意に民謡が感傷的に鳴り出した。懐しい気分になり、戸惑う祐次の眼は、熱気で真赤に充血し、動作の鈍さに反して、赤い眼の中で黒い球が異様にギロギロ動いた。視線が、庭のすぐ横の台所にいる母に走る。母は一瞬、奇妙な音と息子の眼の輝きに動揺したが、火の中に浮かぶ水車小屋を発見する。

「水車小屋が火事なんだ」

祐次の大きくニッと開いた唇に、虫食った乳歯達の中に、唾液のおぶくがたまっている。

「波留に見せたいな」

「取り出しなさい。まだ大丈夫よ。きっと安物の油が中で固っていたのね」

母はいった。底の板が炭になっていた。火が消えても熱い気体にはち切れそうな水車小屋の中は、そのまま

祐次の昂揚した気分が重なりはじめる。波留に見せたいな、ぜんまいも捲きなおし、むさぼるように聞き入った。

それは時が過ぎてからも優しい記憶だった。一年前の出来事。

祐次は幼いが、部屋をひとつ与えられて、ひとり閉じられた自室でその皮フ感覚が甦った。今までも、その記憶が光彩を放つたびに、彼は丹念に風景をひとつひとつ数え上げ、母の言葉を、声を、倦きずに繰返し、笑っている。祐次は裸足だった。生き回り灯籠のように回転椅子をくるくる回しながら、祐次は平衡感覚を失いはじめる。

* * *

突然、彼は見てはならない物を見て顔をこわばらせた。情け容赦もない変な物を見た。金魚が死んだ。机の上の水槽の中で、死んだ金魚はまだ浮かび上がり、白い腹を上に向けて不安定な場所にただよい、水が動いている。先程から愉快な記憶の裏で奇妙な音が鳴っていた。祐次はそれが出きている他の金魚のあぶくの音である事に気付いた。

彼の家には大きな水槽にたくさん金魚がいた。その中で貧弱な金魚は、他から拒絶され弱り、例えば本

来きらめくはずの鱗は、鋭利な三角形の歯で無残にひきちぎられ、白い斑点のごときものをつけられている。彼はそれら弱者のみ、部屋に、別の水槽に移して持ち込んでいた。ひらひら沈んだり、浮いたりする金魚は、彼の部屋をいっそう生臭くしている。何故か部屋は内から鍵がかかるようになってきた。夜毎、彼ら金魚は苦しげに声をあげて、そうするたびに、彼らの息は洩れ、ポコポコ、あぶくの音がした。

灰色に、金魚はその時三匹いた。死が恐しくて、祐次は掬いあげる事もせず、こそこそ寝床にもぐって、闇の中で次第に金魚が浮かび上がる光景を夢見ている。他の二匹の金魚のあぶくの声は絶えず続き、祐次の寝台の横の薄明りに、埃の積った体重計の上の小さな足跡が曖昧だった。

* * *

THE CHINESE FACE - PAINTING ART

「やはりね、あいつは性的に不感じゃないか、と思いはじめているんですよ。君が彼女は不感じゃないかという、僕はいつもそれに反論してきたわけですよ。ところが、どうやら立場が逆になってきた。不感症、冷感症といった場合、問題なのはその女性の知的能力で

すよね。彼女の心理面での戦術的、技巧的側面を僕は重視してきた。君はそこを認めなかった。にもかかわらず君が彼女がそうだといって、僕はそうでないといってきた。君は彼女に対して知性で均衡を保とうというのには全くナンセンスだといつてね。今は僕もそう思っています。いざれにしても僕たちは試していない。だから苦しむのはむしろ君でしなうね。君の方が何ていうのか、ナイーブなものを持ってゐるなあ」

所詮我々とは無縁な話しぶり。わたしの部屋には、中国製の 生のえに赤い顔の、劇に使う面がある。

* * *

それでいてはやくも生々しい感触が、汗で濡れた手のひらにあり、心臓の収縮によって胸にこたえるひびきは時を打っていた。からだから触手は離れて延びてゆき、濡れそりに祐次は熱い祈りをあげた。猫は粘液質の声をあげるだろう

シユンはうすくまっつて、人形を銜え、窺うように動作を止めた。波留の一番大事にしていたその人形は、舌を使ったシユンの巧みな愛撫に放心して全体にくすんだ頬の布のあたりは猫の唾液の異臭を放っている。草が茂る。砂は直接太陽を孕んでいる。鋭利な角で砂が柔かい足の裏に食い込み、腰を下ろして砂を払

ってみると、そこはぶつぶつ穴ぼこになっているかもしれない、幼児の皮膚は無抵抗に何でも受け入れ、弾力に乏しいのに、結局やはり生き物なのだ。赤ん坊は長い間同じ方向を向いて寝て、骨が平たく変形する。そのような重量のかわり方で、祐次は庭に立っていた。シユンは瓦が壊れた、空の見える屋根裏部屋にやってきていた。祐次は背丈の関係で、庭からほとんど垂直に見上げると、その瓦の穴があった。太陽の角度が少し違っただけで、そこには影の部分になっていたかも知れない。恐怖が鼻孔をふくらませているから、祐次は行かねばならぬ事になってしまふ。シユンの執拗な愛撫が、実際に、絵の具で書かれた人形の眼鼻を蕩けさせるまで、それは時間の問題だろう。髪の毛が纏

れている。

足の裏の砂を払わず庭からのぼった。黒く光る固い木製の廊下の板で押され、今度は本当に痛く、梯子の横木で砂を擦り落とした。微妙な砂の粒子が汗線をふさいでいる。屋根裏部屋に立つと、もっとひどく、積った埃の上で祐次は宙に浮いて、確か左手ごたえのある感覚が持てない。銜の臭い、雨の濡んだ染みの広がり、そこに生える名もない葎達、さらにねずみの死臭。シユンは先程の光の輪の中にいない。しばらく何も見えず、何処から何が出てくるのかもわからない。乾いた鼻汗で固まった鼻孔を裏側に持つ、温った彼の赤い

鼻から浮き出る脂肪を、祐次は肩のあたりで拭いた。ともかく不安だった。人形を波留のために取り戻すつもりだった。△波留▽

胸も締め付けられる思いだ。祐次は、うまく巨大な猫、シユンの爪のある手ときふせえるか、両手でおさえ、うまく人形に唇を触れえるか、その角度、というような不思議な不安に取り乱し、いや、その手に触れるのは波留の心に触れるのと同様、まるで不可解な向こうの事だった。この角度から、シユンの眼は見えず、祐次は眉根に皺を寄せた。不潔な観念迷路の温もり、そして少年の感性にのみ時折あらわれる冷たい皮膚。いいがたい観念の深みから流れ出る、抽象的で、しかも肉迫的な息の匂。感性の毛根より薄く生えた自身の体毛が拡大されて眼に飛び込んだ。けものを感じた。

撲殺をすら願って祐次はシユンに向い、殴りつける。いまさらのように波留のシユンは巨大だった。攻撃的に出たのがいけない。祐次の背に、いきなりシユンは爪をたてて飛びつき、先程から不安定な足の踵を軸に棒のまま回転するように仰むけになった。頭を強く打ち、背の下からシユンが例の体温で攻めまくる。そげに板床が針になって頬に突き刺さった。祐次はわき腹を引き破られ、彼の傷口は発情し、足の裏から汗が滲んだ。

祐次がつまりずいてころび、穴に首を突っ込んだ事故死として片付けられた。祐次の母からの申し入れによって、死因は明かにされたが、関係者のショックは大きかった。

わたしは彼ら幼児のために、素裸でなお青い衣装を着た官能的な幼児が描かれる詩か、もしくは極彩色の絵を書きたいと思っている。夜の散歩に出る。星のないうらみの、夜露を照らす水銀灯は、金厘の音を鳴して、わびしく市民の公園をそれらしく見せている。祐次のために、口付けに夢中になっているあの恋人達の唇、石を投げて、濡れて光る歯の二、三本も折ってやろうと、小石を捜したが、わたしの握っていたのは砂の固まりだった。祐次のためにではない、わたしはわたし自身のために投げようとしていた。しかし、砂は形が崩れ、さらさら、舗道に出現した、祐次の埋められた深さ五十センチ、直径四十センチの穴の底に、果しなく落ちてゆき、わたしはわたしの裸足の甲に力いっぱい砂を叩きつける。

「このとりよ、このとりよ、」

飛んでおかえり、おまえのうちへ、

おまえのかみさん巢の中で

四羽の子どもをねかして

一番目はつるされる、

二番目はあぶられよ。

猫の残した足跡は闇の中で血に染まっている。△波留、死ぬかと思ったあ△祐次の蓄積色の傷口に砂が食い込んでいる。朦朧とした意識の中で、ひたすらシユンが人形を置き忘れるのを期待したが、もうしつかりと人形を抱きしめている。△取り戻したぞ、死ぬかと思ったあ、波留▽

猫の脛筋に触れてしまった唇が、やっかいな肉体的変調を予感していた。ふっくらした彼の肉体への執着がある。

△この人形は僕のものだ。波留にかえすことはない僕の人形だ。僕が大事にしまうんだ△不意にこみ上げてきた、その感情は秘やかな恥部だった。祐次は口を開けた傷口に波留の分身でもあり、彼の嫉妬の対象でもあった汚れた人形をおいた。

* * *

砂遊びの坊やは埋められた
四才の女の子に
人形をとられた腹いせ

波留と、もう一人同じ四つの男の子は、猫に傷つけられてより発熱している祐次の頭と足をかかえ穴にさかさまに入れ、砂をかぶせて窒息死させた。しかも、

三番目は焼き殺されて、
四番目は盗まれよ、

アンデルセン

「このとりよ」より

創作

野辺おくりの歌にかえて「了」

とにかく少年の創作は発表された。彼はRにいった。

「買わないか」

「うん、買おうじゃないか、はやく読みたかったよ」

Rは得々として答える。
無いけど、猫の名前ね、あいつに聞かなかったんだよ。あれ、俺が勝手につくった名なんだ。君もどじな男だねえ、せめて君自身が猫を飼うんだくらいに言えば、俺もあわれんで聞いてやったものを——
△してやられた△少年は硬直し、皮膚呼吸をあきらめ、大きく腹をつかって息をしている——。

或日、わたしは街路で少年に出会う。厚かましく煙草を吹かしていたわたしの前に、彼は赤く腫れた眼で現われた。

「寝てないのか」

「まあな」

「どうして、こんなところを歩いているんだ。まさか……あいつのところへ行っちゃったわけでもあるまい」

「俺があいつと何らかの関係がある、といったふうな事があるのさ」

「ともかく話をしよう」

少年は素直に向きを変え、わたしと同じ側に歩き出し、それはとても投げやりな感じで、わたしの方が一瞬立ちどまってしまった。彼が二・三步前をふり向きもせず歩き、狭い肩幅の彼の背を見たわたしは、急いで歩を速め、彼の肩を両手で懐き込んでいる。訳のない嫉しさが、わたしの精神に寒い冬の空をかけた空洞を呼び、不意に内なる空洞がとりまく気配の中に滲み出し、すっぽりと包み込んで息苦しくなってしまう。青みを帯びた暗い少年の顔は、憂鬱な空の色のためばかりでなく、少年の透明ゆえに見えぬ醒めた心のせいなのだ。疑うのは誤りだ。

「いろいろあったんだってな」

「何もなかったさ」

痛々しかった。彼は狭い肩幅をいっそう小さく円くし、わたしの胸におさまっている。いとおしいと思つた。《どうしてそんなに小さくなっているんだ。彼をうちめす、残酷な事をいうのなら、今、このような時をおいてはかたに、相応しい時はないかも知れない》わたしは同情的に、

「Rがね、こんなふうだった。してやっつたりだつたが、書かれています事に詳しいはない、何か嫉妬のよいなものを感じる、と」

「慰めてくれるのは有難いが、Rがそんな事をいうわけがない」

「Rもまた、悪意を持ち、自身の悪意には裏切られたと信じ込み、それでいて悪意はりっぱに他社に通用し、孤立してゆかざるを得ない、といった種類の男だよ」彼自身の気の毒な性格を見抜いているといわんばかりにいつてみた。

「ひとはそれ程単純でもない。随分、おまえはしゃれた、まわりくどい言い方をしたけれど、俺は信じない」本当にそうだった若いRの顔が浮かんで、同じ一人の少年を見る思いがする。次第に手力がかもっていった。わたしの手は柔い彼の肉に食い込んで、欲情が次の言葉やさそい、それは《俺と寝よう》でももうよりな言い方になってしまった。

「おまえとQは homosexuality だとさううわさがある。おまえがあの女を抱き伏せた事があったね。すなわち、あの話では祐次っていったかなあ、彼が猫と格闘する直前の緊張した彼の心情だ、そうだな」

少年の肉は不意に弾性をとり戻し、したたかに端びるよりに抵抗をはじめた。《さうではなかったのかもし

れない》

「とにかくおまえは抱き伏せた。あれ以来、あの女は毎日腹立たしく、鬱陶しい日が続いたさうだが、おまえがQと homo していると聞いて、急に気が暗れたとさうなんだなあ」

「聞いたさうな事をいうんじゃないか。Qは知らないね。第一俺は男色家じゃない。そんなものであつてたまるものか」

綿くわいて彼は長い沈黙に入る。彼の鬱屈した心理を諷むべく、わたしは指は階段状の彼の背骨を確実に弄りていったが、ちょうど吸い過ぎた煙草のため痛みでうすく胃袋の裏を通過しようとした時、彼は勢よくわたしを振りほどいた。闇の中では汚れを思存分出しつくす場末のブルーやピンクのネオンも、まだ明るい時間の谷間で、今はけばけばしさを失い、ある果しない距離の向うで、奇妙にほやけてみえる。《髭毛に風の吹きぬける寒さだ》わたしの情欲の酔いは醒めていた。

「俺がはじめて夢精した時だよ。近所に春麗カリエスの男がいた。男といつても、ちょうど今の俺達くらい、十七・八といったところだ。あの粘体カリエスの膿だと思つてね。夜毎、悶々としたよ。性の予感すらなかつた。性についてか、カリエスについて、もう少し知識があればよかつたんだがなあ」

少年の眼が光り、彼は不意に威圧的に笑い出す。よたよた汚れた白壁に、弱々しい背をすりつけて、もう歩けないというふうに笑っている。そのあまりの激しさに、ついに、わたしはつり込まれて笑いはじめる。《いつか話を書いてやるぜ》

少年は笑いたがらう。

「有難う……有難う」

意図せぬ間抜けた返事を、わたしはさう答えてしまつてゐる。

「了」

政治の正義 — 財産編 —

ウイリアム・ゴッドウィン著
はしもと よしはる 訳

B6版 定価四百円

発行所 バルカン社

東京都新宿区東大久保一四六四
振替 東京64906

仮面の儀式

里見謙作

芝居の幕があがる。

既成のイデオロギーの

寄せ集めと、

書物を通じて

現在を生きようとする、

役者と観客の

知的マスタベーションが始まる。

マルクスから北一輝にいたる

過去の偉人の、

金屋製の精密な仮面が

役者と観客に配られる。

時間と空間を超越した
かびくさいにおいのする

仮面の言葉は、

現在を規定して、

政治的革命を語り

社会的革命を語る。

おのれの言葉と、

おのれの行為で、

破壊への旅について

語った少年は、

異端者の刻印をおされ

芝居小屋から追放された。

役者の顔はノッペラボー

観客の顔もノッペラボー、

体制の秩序の中の芝居小屋では

仮面の儀式が進行する。

9・23集會に現われた

ARFの本質について

小三木 報 淑

(1) 昭和四三年九月二三日、「中浜鉄遺稿集出版記念座談会」の行なわれた後の会場を借りて「九・二三講演と討論集會」において、ARF（アナキスト革命連合）とその同調者は、次のような批判を行ない、その集會を粉碎しようとした。（詳しくは彼等の自称政治機関誌「自由と革命」第一号P一五―一九を読みたい。）

① 九・二三集會の実行委員は、オールド・アナキストの戦后責任を追求しえないばかりか、無批判的に追従している。それ故にその体質は、オールド・アナキストと同一である。

② 実行委員の発想は、ノン・セクト運動に対する評価という局面での問題提起を自らの運動とそれがいかに斗かってきたのか、というもう一つの局面を無視して問題提起しようとするマス・コミ、ジャーナリズム的発想である。

③ 実行委員は、ARFが集會粉碎の態度を明確にしたのちにも、京阪神アナキスト全集団共催の集會であるとか、共賛の意を全く表示していない集団の名称を勝手に共賛の中に加えたりするような運動者以前の体質を有する。

ARFは、集會に対する批判を以上の三点に集約し、次のような結論を導きたす。

「ARFは△記念▽することによってオシャベリすることしか出来ぬ主体はもはや運動主体ではなく、運動の阻害物でしかないと考えるが故に、△記念▽を表出させたところの思想を粉碎し、同時に△系譜▽の思想を破碎する。そして、自らの運動展開過程からの位置付けを放棄してマス・コミ的論理においてしか集會を組織しようとしないうという実行委員会の運動主体としての根拠点の消失を糾弾する。かかる発想の基盤をこそ批判し、運動としての形成を押し進めるのでなくてはならない。」

このARRFの見解について、実行委員の一人として私見を述べることにする。

さて、九・二三集会は、たしかにオールド・アナキスト(このような規定は、私自身は使いたくないのだが、ARRFがこの語を使っているので便宜上使うことにする。)から、集会の場を提供されたにすぎず、その事に関する政治的意味合いは全くなかったのである。(このことを指して、オールド・アナキストに無批判的に追従する体質とか、系譜の思想とかいって騒ぎ立てるのは、笑止千万である。)

それはさておき、九・二三集会は、戦后二十数年もの間の大衆運動におけるアナキズム運動のブランク(この評価は、現象面的にアナキズム運動として脚光を浴びた部分、又はアナキズムを自称する部分のみ、アナキズム運動として評価する誤りをおかしている。真の意味での日常的永続的斗争を続けている意識的無意識的土着アナキズム運動に対する視点が全く欠落している。これが自己の存在を必死に訴えて訴えるARRFは判らないのだ。ともあれ、この現象面的マス・コミ受けするアナキズム運動の欠落を口実として、ARRFおとくいのオールド・アナキストの戦后責任という何等重みを持たない言葉がでてくるのであるが、実にアナキズムというものをスターリンの主張するような社会主義の一派のレベルにまで自ら下降せしめ、アナキズムを矮小化させたところの下らない発想である。それ故にアナキズム運動を自己にとって都合のよいように解釈したところの基本的アナキズムと縁もゆかりもないセクト主義的発想から派生するものであり、現実の相互補完するところの革命運動にとって有害無益なものではかありえない。それ故に、戦后アナキズム運動はアナキストと自称する部分

例えば日本アナキスト連盟——によってのみ維持されてきたのではなく、その命脈は細々とながらも個別的に何等脚光を浴びることなく、土着の大衆運動として、あるいは大衆自身のアナキシーな心情により保持され、六十年代後半に至って既成マルクス主義の破産をのりこえたはずの革命的マルクス主義(反スターリン主義)の理論的実践的破産と共にその存在が急速な成長をもたらしたのである。又それはアナキズム運動の本質からは当然の事実であり、それ故にARRFが実践的な大衆運動としてのアナキズム運動と何等関係のないいわゆる商業ジャーナリストに対して、戦后責任を追求するのは見当違いであろう。それとともに、屋間開かれた「出版記念座談会」に出席したメンバーを、彼等自身の日常生活を何等実践的科学的に検討することなくして、それを十把一からげにオールド・アナキストと規定するような一種の専制的独断は、本質的にアナキズムと全く関係のないことであ

る。アナキズムの革命を目指した多種多様な斗争戦術を相互に認め合い、かつそれが革命にとって相互補完的機能を果し合うことを認めるアナキズム運動の本質(ここがボルシェヴィズムとの決別点なのだ)を体質的に理解しえないARRFとは、アナキストと自称するには余りにも致命的な無理解であるとしか言えない。)を経て、現在再び大衆運動の一翼として表面化してきた新しいタイプのアナキズム運動というものを六九年秋期斗争を目前にひかえた今秋の段階で自己の総力をかけて捉えかえすことによって、自称ノン・セクト・ラジカルをアナキズム運動の一員として目的意識化させることによる運動の新しい展開の突破口として期待されていた。

それ故に九・二三集会は大阪ARRFが主張するように△記念Vの思想や自らの正統性を主張する△系譜Vの思想とは全く関係のないものであり、そのような九・二三集会を先のように規定するところに、他者の運動と自己の運動を相対的に把えることなく、自己の運動の前進なき時は他者の運動の足を引くというまさにおさまなボルシェヴィキ的偏向を露呈した。

ところでARRFは先に述べた集会粉砕理由の③において、我々が九・二三集会を京阪神アナキスト全集団の集会であると詐称したといっているが、これは全く事実を歪曲するものである。九・二三集会が全てのアナキスト・ノン・セクトの諸君に開放されているのことに對する事実認識であり、我々はARRFが九・二三集会を支持していると言ったことはない。(神戸アナ研に對しては実行委員会のカン違いから共催団体としての扱いとして迷惑をかけたことをこの場で謝っておきたい。)しかし、我々はARRFの参加があるのは彼等の運動の発展においても当然のことと理解していた。ARRFの参加を伸張しつつある関西のアナキズム運動の更なる発展のために期待していた。

しかるにARRFは、集会を彼等の運動にとって障害物であり、それ故に粉砕すべき対象として掲げた。それは相互の見解の違いのだから仕方がないといえるのだが、しかし、彼等が我々の提起した九・二三集会をナンセンスと規定し粉砕を考へるならば、我々の集会とは別に彼等独自の大衆的政治集会を開催し、来るべき秋期斗争の展望を樹立すべきであった。(すくなくともARRFが自らをアナキズム運動の旗手として自負するならば、彼等が秋期斗争を迎える段階で自己の斗争を大衆に問うためにも彼等独自の政治集会を開くべきであったと云っているのである。)

それでは大阪ARRFは何故独自に政治集会を行なわなかったのか。私の分析によると、まさに大阪ARRFは、

そのよりな大衆的政治集会を独自に行なえる能力も力量もなかったのである。それ故に我々からみるとA R Fにとって為しうる最善のことは、運動と全く関係のない集会（と彼等大阪A R Fは主張している）を内部的に介入することによって、その集会を彼等の目指す方向へ位置づけることであつたはずだ。我々には、A R Fの参加を拒否する意向は無かつたし、そればかりかその参加を再度促がしたのであつたが、それを彼等は拒否すると共に集会粉碎の決意を表明した。大変残念なことであつた。

さて、私は今までA R F自体がアナキズム運動を行なっているという前提には何もふれないで述べてきたが、A R Fに関するそのような疑問を若干のべてみたい。

① A R Fは、本当に斗っているのか？ そして彼等以外のアナキストは運動にとって反革命的犯罪的吗？

② そもそも運動とは何なのか？ ノン・セクト運動に対する評価はどうあるべきなのか？

③ 彼等は本当にアナキストなのか？

秘密出版めいた体裁の「低迷する関西のアナキスト戦線とA R Fのあゆみ」を読むと彼等はいつたい、アナキズムの組織論である自由連合主義というものに対する基本的な理解を有しているのかどうか、私には全く疑わしく思われる。彼等は、自らの斗争路線として、ヘルメット↓発煙筒↓ゲバ棒↓劇薬ビン↓火炎ビン↓ダイナマイト↓時限爆弾↓銃等々のエスカレート方針を挙げており、しかも、事実上彼等は何も出来ない。自分で使えもしない武器にアコガレを抱いており、他者の現実的な斗争路線を認めようとしない、全くの駄々っ子グループである。故にアナキストと彼等が自称してしようと、そのカッコよさに共鳴しただけにすぎない、アナキズムの組織原理たる自由連合主義を行動において放棄しているのである。そもそも自由連合主義とは、「求めるものは連帯であり、その方法は自由である。」というスローガンに端的に表わされるように、革命に到達するための闘いに種々の斗争方法があることを容認し合い、あるいは、斗争に関わる個人およびグループの特殊性を考慮し、お互いの斗争が究極的には革命にとって相互補完的な、全く矛盾しないものであることを確認することである。

自己の戦術を絶対化し、他者の全ての斗争を否定する。これはもはやアナキズムと言ひよりは、ボルシェヴィ

ズムといった方が適切であろう。例えばアナルコ・ボルシェヴィキ（アナシェヴィキとでも略するか？）という名で呼ばれるべきグループである。私は、彼らのことをアナキスト革命連合（A R F）というよりは、平岡正明氏ばりのアナキスト独裁連合（A O F）とでも改称すべきことを提案する。

彼等に出来ることは、細々とながらも、こつこつとやっている諸君をいじめること位ではないだろうか。その上、彼等の言動からすると、もはや非合法斗争の段階に入っている（これは基本的に正しい。）にもかかわらず、その非合法斗争の準備どころか、その心構えさえ出来ていない、全くの合法ムードにどっぴりとはまりこんだ、形や名称等ていさばかりを重要視する昭和元祿（この言葉をこの場でA R Fの諸君にお返しする。）の畸形児のサロンの陰謀家集団であり、全くのドジ踏み集団であるとしかしいようがない。そして彼等の斗つた形跡は、全体的に彼等A R Fの諸君から離れていった諸君によってその大半を背おわれていったといつても過言ではあるまい。

彼等の発想からは、そのような事実は一切眼に入らないし、彼等の耳に入らなかった運動は全く存在しないのである。

例を挙げるならば、京都の全共斗運動におけるノン・セクトのヘゲモニーの貫徹の意味を全く理解しえない。これは彼等が実際に個別的斗争をやっておらず、街頭デモしか出来ない限界からは当然の帰結なのだが。——ここから明瞭に分かるように、我々に対して、侮蔑的に与えた「ノン・セクト運動の意味を理解せず、それののつかる姿勢である」ということは逆に彼等A R Fの上のしかかっている。（例えばデモにおいても全共斗運動が大衆運動であるにもかかわらず、そこから戦斗的部分を遊離させて、反日共諸君セクトに対するコンプレックス故の独自の軍団形成という性質を有するのはよい例であろう。）

A R Fは、マルクス主義者のように前衛党を必要としており、彼等にとっては彼等こそが前衛なのであり、他者は異端者なのであり、反革命にすぎないのである。まさに日共が自らこそが前衛党であり、それ故に大衆を指導する必要があると妄想にしがみついているが如く、端的に云うならば、A R Fは大衆組織を指導するアナキスト組織をつくり、更にそれを指導するものとしてA R Fがあるというような組織論なのだ。全くのセクト主義、官僚主義にあきれてはA R Fから離脱していく部分が纏出しているにも掲らずA R Fはそれらの部分に勝手に「オンシャベリスト・ゲバルト・ブローカー」等の好きなレッテルをはることしか出来ず、あまつさえ総括

とめいりうって自らの斗争のみじめさを暴露した「低迷する関西のアナキズム運動」という馬鹿げた客観主義者の情勢分析観を露呈している。

私は、全共斗運動・ベ平連運動・反戦青年委員会運動に象徴的に表出される、いわゆるノン・セクト・ラジカルの運動は、日共スターリン主義に代表される反日共系諸セクトをも含めた官僚主義者達によっても明確に認識されていること、彼等セクトの存在に対する全面否定形として出現したアナキズム運動の一形態であると理解している。これに対するARFの諸君の一部の見解は、全くの魔女狩の要素を多分にもった異端排外主義であった。「ノン・セクト・ラジカルはアナキストではない。吉本主義は究極的にはアナキズムに敵対する。……等々。」誰が果してアナキストであり、誰がアナキストではないのか。彼等は何を求めているのか？アナキストのみによるアナキストの為のアナキスト革命。……まさか、そんなものはありはしない。

さて、アナキズムが人間解放の原理であり、人間自らが誰も保持しているものであるならば、根源的に人間解放を至上目的とする思想には当然存在するものである。それ故に、吉本主義にしろ、マルクス主義さえも、それは根本的にはアナキズムの一潮流といつてよいであらう。それはさておき、私はこのような組織の増大はアナキスト革命派の増大という単純な公式に対して全く反対である。口では組織よりも運動の発展の方が大事であるといひはするだろうが、彼等の現実の行動は先の公式を裏づけている。我々は現実の斗争において、その過程と結果を重要視する。京都における運動体として存在したのは、ある時はASFであり、アナキスト軍団であり、別の時は幻の黒軍であったし、関西全共斗連合であった。それらはARFが我々の欠陥として指摘したが、その指摘どおり、事実上の組織としては存在しなかった。我々は、このことをARFの主張するように欠陥とは全く思っておらず、逆に利点だと思つてゐる。形象あるものは必ず壊れる。形象なきものは、物理的の力が加わつても、いつても形象を変えてることによつて破壊を免がれる。すなわち、不定形の思想であり、これが全共斗運動が最後に到達する地平である。まさしく全共斗運動はメーバ運動にまで到達させられなければならない。我々は事実上の指導部を持たず、各大学集団の有機的結合を繰りかえすことによつて事実上、その勢力は反日共系諸セクトのどれをも凌駕した。我々の運動は本年一月一六日の京大、立命大同時パレード封鎖に端を築き、その斗いを関西各大学へと伸張させた。ノン・セクトと

の連合は京都の地における反日共系諸セクトの調落をもたらした。ARFは、このような情勢を全く理解し評価しえず、京都ARFの樹立を主張した。それは運動にとつて分裂と孤立をもたらすが故に我々には不可能とみなした。

このようにみると、京都段階の運動に対してでもが評価が違ひるのが明白であり、彼等ARFの自由連合社、その他もろもろの研究会对する評価は全く違ひている。自らが何も為しえないにもかかわらず、他者が何も為しえなかつたと叫ぶことにより、自己の斗争破産を隠蔽することに必死になつてゐる自称アナキスト革命派ナルコ・ボルシェヴィキの最後は近いと私は確信する。

地底のうた (1)

労働放浪監獄より(抄)

作者 後藤謙太郎
再録者 成岡甫

後藤謙太郎、一九二五年、巢鴨拘留所にて自殺、三〇才。生涯を犯罪と放浪に送る。一九二二年、中浜哲との出会いが日本最初の左翼テロリスト集団ギロチン社の結成の発端となる、といわれている。「労働放浪監獄より」は大正一五年大阪で逸見吉三らの手に発行されるが発禁禁止となる。

尚、次回地底のうた(2)は河合康左右

そのかんの、おれは
きゆうそくしよよ
かんとくの、まど。

×× ×× ××

なるかな
かれらに
われらに
××は
せいぎぞ

かかるひぞ
×××を
なげつけむ

立命館大学二部斗争史 (1)

「平和と民主主義、よりよき学園生活」

路線から「大学解体」まで

秋 月 長 隆 彦

〔はじめに〕

現在の立命全共斗二部ノン・セクト連合共斗会義（以下二部斗と略す）の運動を今日の時点において総括するならば、その段階的存在である二部学生連合（SF）の存在を無視することはできないであろう。そもそも、二部学生連合は昭和三八年以降の、特に三九年以降の日共二部学友会一派の独裁体制下において、いわゆるノン・ボリの学生によって最初結成され、反日共系諸セクトに一時的に依存しながらも、却ってそれによりセクトの本質を見破り内部反セクト主義を構築し、その後一貫として、現在の全共斗運動の地平に到達するまで、二部における唯一の強力な自治会内左翼反対派として斗ってきたのであり、それ故に、我々には、二部斗の総括と展望をのべるまえに、二部学生連合の思想的変遷と斗争——主に、ノン・セクトへの自立過程などの——を語ることなくしては、現在の二部斗の存在さえは語る事ができないのでまず最初に二部学生連合の総括を述べてみた。

I 二部学生連合の成立以前の学内状況

さて、二部学生連合の何故に形成されたかの成立理由を述べたためには、その結成までの二部の学内情勢を検討することなくしてはありえない。故にここにその概略をのべてみることにする。

昭和三十六年、日共八回大会において、いわゆる「宮本綱領問題」で日共党規約さえも全く無視した非民主的状況で日共を除名された「社会主義革新運動準備会（社革新）」のメンバーは、当時日共系二部学友会の執行部であったので日共除名後もそのまま二部文自を除く二部学友会、二法自、二経自、二理自等の執行部にいすわりつづけ、その後再び社革新の「前衛党問題」による統社同IIフロント系との分裂の結果、学友会運動のヘゲモニーは統社同IIフロントに移行した。

しかし、このようにして一度は学友会・自治会のヘゲモニーを奪われはしたが、日共は再び昭和三八年の自治会選挙において、自治会における全てのヘゲモニーを奪いかえした。その結果、統社同は自治運動におけるその拠点を失った。そのため、統社同は、当時その運動論上、「平和と民主主義」をスローガンとしていたが故に、彼等の大衆運動においてポツダム自治会は必要不可欠なものであったが故に、日共自治会執行部に対する自治会反対派フラクションとして構改革三派連合（統社同、社革新、社青同構改革）により、二部学生統一戦線を結成し、「平和と民主主義、よりよき学園生活のため」というスローガンをかけて日共に対抗した。

そして三八年秋期学費値上げ反対斗争を学園民主化斗争の一貫として展開したが、その勢力は法学部を中心としたものであり、全学的なものとなりえてはいなかったが、日共自治会執行部との共斗により、学費値上げ阻止のみには一応成功した。しかし、この学費値上げ反対斗争は、現時点からみると、あくまでも改良斗争の域を出ず、（これは学園民主化斗争を両者ともに標榜していたため、当然のことである。）それ故その斗争自体もいかならば、現在ではごく常識である「幻想としての立命館民主主義」を至上のものとして受けとめており、斗争はその不完全な部分をより完全なものにするという擬制を背おっていた。それが故に立命館民主主義は、今日のように打倒対象とはなりえておらず、いわば、大学のしきの御旗であり、学生支配には必要不可欠のものであった。それが故に三八年学費値上げ反対斗争は、必然的にその改良的性格から立命館民主主義の補強へのステップとして予定されていたものであり、学生の大学運営への形式的参加により綿密な制度的完備をもたらし、当然の如く、それは、二部においては二部学生連合の創成時II改良斗争時の争点となった「二部対策要綱」にて結実していった。（これに対する批判は後述べる。）

そして、昭和三九年、統社同は日共に対するリターン・マッチ選挙に惨敗し、昭和三九年一〇月の二営自結成選挙に敗れるや、自治会運動II大衆運動をアキラメ、生協運動にその政治的延命を賭けた。そして、それ故に学内斗争は一切さげ、もっぱら風間の学生運動の補完物としての街頭政治斗争に終止した。しかし、それは、二部における自治会反対派に対する大衆の期待を裏切り、結果として大衆の創造的エネルギーの噴出を阻害した。このようにして、二部における自治会反対派は一掃され、この結果あらゆる大衆の自発的創造的エネルギーは日共スターリニストによって庄殺されこの状態のまま、またたく間に三九年もすぎ、四〇年もすぎた。

しかし、昭和四一年五月、後に二部学生連合を形成することになるノン・ボリの部分が、日共自治会の圧制を

打倒し、当面、二部における自治会反対派を形成するために、現代マルクス主義研究会（後、社会主義研究会と改称）を結成し、ここに拠点をおいた。

ところで、この研究会は、最初から日共に対抗するための反対派の形成を一つの至上目的として作られたものではあったが、その構成メンバー自体がほとんどノン・ポリであり、その意識状況が即物的な「平和と民主主義」路線であり、元統社同の残存メンバーの多大な影響もあり、構改革の改良斗争の理論を必然的に吸収していった。そして、この研究会の有志のメンバーの中で、いままでの斗争を総括し、新しい二部の学生運動を形成するとうり確認が行なわれた。

それは、次のような今からみると全くのノン・ポリ的傾向を帯びており、いわゆる自治会民主化闘争と闘争のめざしていた。

- ① 三八年以降、統社同が行なってきた二部における運動は、たんなる一部の運動の引きつりにしかなかった。いうならば、一部の街頭政治斗争に対するたんなるデモ要員ぐらゐの補完物的存在にしかなかった。
- ② それ故に自治会左翼反対派による二部独自の運動は三八年以後ほとんどありえず、現在までの斗争は、二部学生の直接の利益とは何等関係のないものであった。それ故に大衆運動となりえなかった。
- ③ それ故二部学生の要求斗争からスタートすべきであるが、民青の諸要求貫徹路線とに明確な一線を画く。
- ④ そのためにも、六〇年安保時の全国夜学連の運動を再建する。

このようにして、新たに形成された自治会左翼反対派は、種々に名称をかえながらも、次第次第にその勢力を増大していった。そしてその改良主義的発想故にと、いまだ全国指導部の必要性を信じていたが故に、それらのメンバーの大部分は民学同に合流していったが、しかしまもなく、民学同がもつその悪しき自己の党派的利益追求路線——大衆の利益とは全く関係ない（このことは民学同に限ったことではなく、全ての党派に云えることである）ことを忘れてはならない——についていけず、あるいは見限り、やがて全員離脱していき、元のノン・ポリという自由な姿にもどっていった。

昭和四二年四月、二部法学部学生大会において、数年ぶりに、対案が提出された。（この対案提出が、脱セクトとはいえ、無党派のメンバーによってなされたことは、当時の全国学生運動上、全くの珍しいことであった。

このようにして、全くセクトの指導なくして、脱セクトをも含めたノン・ポリが、学生大会の対案を未熟ながら自力によって提出したことにより、政治的に自立したことがわかるのでこれ以降二部の無党派をノン・ポリといわずにノン・セクトと呼ぶのが適当であると思われる。）

さて、この昭和四二年四月の学生大会は又、非常に奇妙な学生大会であった。というのは、この大会は、正式には昭和四一年度の第一回学生大会であったのである。そしてこの大会において、日共法自執行部の非民主性が大衆的に暴露されたのである。

すなわち、昭和四一年に開かれるべき学生大会を昭和四二年に開いたのであり、すでに過ぎ去った昭和四一年の方針案を昭和四二年四月の時点において可決し、昭和四二年の方針は未提出という全くの茶番劇が行なわれたのであった。（このことは、全自治会において行なわれたのだが、法自を除く他の自治会においては、未だ自治会左翼反対派の形成が遅れており、一定程度形成されていた法自において非常な問題となったのである。）この全く常識はずれの自治会民主主義の存在する余地さえない蛮行に対して、一回生を中心とする学友の非常な憤りが起ったが、それに対してまたまた、法自執行部は、事実を全く無視した形式的弾圧でそれに対処した。すなわち、これは四一年の大会だから四二年度入学の一回生には採決権がないというのである。これに対し、後で学生連合を形成する部分は徹底的追求を行なったが、彼等は定足数にも達していない学生大会を成立したと称し、この方針は以降一貫としてつづいている。弾圧的に大会を通過させた。ここに、立命二部の大衆斗争は、最初は自治会民主化斗争として、スタートした。

さて、二部学生連合の結成は、このように、日共が官僚的、強権的に全学を支配し、元統社同のグループが全く自治会斗争を放棄し、生協運動にしがみついた結果、全く学内において日共に対する批判勢力皆無の時、ノン・セクトの部分によっておこなわれたのであることを我々は銘記しておく必要があるだろう。

我々は、このような事から、斗争は誰の指導がなくても（すなわち党派の指導がなくても）、自然発生的に起り、斗いは深化していくという教訓を得た。六〇年安保で大衆によって打ち破られた「前衛の神話」の崩壊はここにおいても事実上確かめられたのであった。

II 二部学生連合の成立

(1) 二部学生連合の組織論

二部学生連合は、先きのべた非民主的な学生大会が終ってしばらくたった昭和四二年七月九日、全ゆる新左翼
II 反日共系諸セクトを糾合し、それと共闘することによって、反体制運動の推進を勝ちとらんがため、後にノン
・セクトとして自立する部分によって結成された。

さて、二部学生連合のこのような連合形態は、現在の全共斗組織の最初の萌芽形態である昭和四一年早大斗争
において形成された早大全共斗の組織をモデルとして作られたものであり、それゆえに二部学生連合を構成して
いるメンバー自身、現在の全共斗運動においてセクトが主張しているような統一戦線方式IIセクト連合のイメ
ジを持っているという根本的アヤマチをおかしていた。

しかし、構成メンバーが、セクトに入っているセクト性をださず、ほとんどがノン・セクトのメンバーで占
められていたため、内部的対立は、あくまでもセクト間の利益によって左右されることなく、事実上、ノン・セ
クト的思考によって未然に防がれていた。その意味において、二部学生連合全体の意志形成は、既成左翼の連合
組織の意志形成とは根本的に異っているものであった。

それ故に、その内部における組織論自身が構成員一人一人にとって非常に重要視され、それをめぐって種々の
試行錯誤が行なわれ、論争が展開された。そして、その中において民主集中制、民主連合制、自由連合制がそれ
ぞれ提案された。

まず、我々の間において、民主集中性という組織論を採用することは、現実の二部における反日共系勢力の弱
体ぶりから考えると、一つの意見を全体の意見に多数決により集中するということは、未だ弱体な二部学生連合
の勢力の分裂の危機を招く危険が非常に濃い、すなわち組織の弱体化を招くだけであるとの、いうならば政治主
義的功利主義的判断とともに、民主集中組織論がもつその本質、すなわち、異なる意見（反対派）の存在を究
極的に認めず、自ら以外のものを敵対者とみなすような、いかえらば、人間個人個人における斗争への関
り方への様々な形態や状況の特殊性を全く理解しえない、人間を全く組織の一歯車に転化する非人間的組織論と
しても否定されたのである。

次に民主連合制が提起されたが、これも、各個人の種々の斗争への関わり方の差異をこそ認めるが、それはあ

くまでも過渡期的にであり、方針の決定はやはり多数決主義であり、民主集中制をより巧妙にカバーしただけに
すぎないという観点からこれも拒否された。

そのようにして、二部学生連合は、組織論として、自由連合主義を採用した。この次元における自由連合主義
とは、まさにベトナム反戦姫路行動の向井孝氏の主張するような、全く組織論の異なった民主集中制の組織論を
もつ反日共系諸セクトまで、その適用をすぶすぶに扱った自由連合主義であり、現左における我々の解釈とは、
基本的に異っていたものであった。

いふならば、そのように自由連合主義の適用範囲のハキ違えをすることは、たとえその組織が、自由連合主義
を標榜していようと、その組織に参加している諸セクトが、民主集中制を自己の組織論として維持している限り、
質的に自由連合主義がその組織内部において貫徹されるわけがないのである。

それ故に自由連合主義とは、いふならば自立した個人と同じく自立した個人、自立した個人と自立した組織、
自立した組織と自立した組織との間においてこそ初めて有効性を発揮するものであることを忘れてはならない。
このことを全く理解せずに、セクトの防害による自由連合主義の実質的適用の不可能から、自由連合主義の不可
能性をとくものがあるがこれは全くナンセンスなことであり、彼等はその主張による最終的に党さえも解体する
とき、個人の自由な連合が必要であることをわすれているのである。それ故に自由連合主義はそれらの個人や組
織の種々の斗争への様々な関わり合いや、斗争へのいろいろの動機、多種多様な斗争方法を一つの斗争において
相互補完的なものと認め合うことによって、斗争をより効率的に多種多様な方向からすすめていく組織論なので
ある。

そのことを完全に理解していないまま、セクトをも含めた運動の連合体の形成を目指した二部学生連合は、
今からして思えば、いつかノン・セクトのメンバーがセクトの主張するように全員セクトに吸収されていくか、
あるいは、現在のようにノン・セクトがセクトを最終的には革命に対する敵対物とすることを理解し、セクトを
打倒する方向性を打ちだすか、そのような矛盾が最初から内在していたのであった。

しかし、それはさておいて二部学生連合結成時には、二部においてははいまだ、セクトが存在せず、その後、セ
クトが次第に誕生しはじめても、日共に対する二部学生連合の力がまだまだ弱く、各セクト自体が弱く、また
各セクトのセクトの利益追求がまだまだ弱かった時には、その矛盾は爆発することなく、苦積されていたので

(2) 二部学生連合の運動論

さて、組織論として自由連合主義を確立した二部学生連合であったが、その斗争論はまだまだ不完全なものであった。それ故にそれは、学園斗争論と街頭政治斗争論とにわけることができる。すなわち、二部学生連合の運動論は、未だ学園斗争論と政治斗争論が完全に一体化しておらず（これは斗争の経験が全くなかったノン・ポリのグループとしては、仕方ないことであると云えるだろう）、街頭政治斗争においては、旧三派とともに実力斗争を行ない、それと併行して学内においては改良斗争をやるといった全く理論的一体化のないまま、運動をつづけていたのが実状であり、その理論的統一が完成されるには、現在の全共斗運動の出現を待たなければならなかったのである。

(1) 二部学生連合の学園民主化斗争論（特に自治会民主化論）

そもそも、二部学生連合の形成自体は目的意識的に形成されたものではあったが、客観的にみると、それは必然的にその形成を予想されていたものであった。

云うならば、先に述べたような日共・民青の学友会・自治会支配は、彼等の民主主義路線の実状を端的に暴露した。自治会運動は有名無実のものと化し、学生大会は開かれず、自治会員は全て自治会運動について何も知らされず（全共斗追放後の現在再び同じような暗黒政治が復活している。）日共スターリニストは自治会を彼等の私物のものでとし選挙斗争や資金ルート、同盟員オルグの場と化した。それらに反対するものには、最初無言の圧力が、最後にはリンチが待っていた。

日共・民青は、彼等の主張する自治会民主主義プロレタリア民主主義の形式的民主主義さえも何等破るのに憶面もなかった。そのくせ、立命館Ⅱ民主主義の啓、日共Ⅱ民主勢力の仮面をかぶりつづけることによって対外的には民主的なポーズをとりつづけていた。それらの実状は右翼が支配する大学よりも惨めなものであった。

これに対する一般学生の反応は、まず「長い物には巻かれろ」であった。大学における日共の勢力、それは一人一人の弱い力を立ち上がらせるには余りにも強すぎたのであった。それにも増して、彼等の内部には立命館Ⅱ民主主義の啓の虚構が余りにも強く注ぎこまれており、その存在の有無を疑うことは皆無であった。ポツダム自治会に対する態度も同様であった。

しかし、長年の彼等の圧政に対する二部学生連合の告発は、一般大衆に対して多大な反響を与えた。しかし、二部学生連合自身、体質的にノン・ポリであり、未だポツダム自治会そのもの、立命館民主主義そのものに対する問いかけを想起することさえできず、ただ現在の自治会運動と大衆の遊離というものからの問いかけから派生した自治会民主化運動にすぎなかった。

二部学生連合の自治会民主化運動の骨子は次の諸点に示される。

- ① 自治会運動そのものに対するもの
 - (イ) 自治会執行部の学生大衆からの遊離
 - (ロ) 街頭斗争に対する自治会執行部のポイコット、改良要求に対する自治会執行部のポイコット
 - (ハ) 統一戦線問題
 - (ニ) etc
- ② 自治会規約に対するもの
 - (イ) 学生大会の定員
 - (ロ) リコール権問題
 - (ハ) 執行部の選出方法
 - (ニ) 選挙管理規定
 - (ホ) etc

簡単に云うならば、現在の日共執行部はまさに大衆の要求を何等組み上げていないし、それに対する大衆利益の救済方法——例えばリコール権さえも明確でない、というような自治会運動における能率の問題に対する告発であり、単なる目先だけの追求にすぎないものであり、それ故にその自治会を戦斗化、民主化させるためには、ただその執行部の首のヌゲカエさえあれば、例えば我々が執行部となれば確立されるという錯覚に自ら陥ちいつていた。まさに、ポツダム自治会に対する根底的な追求が有えなかった為、自治会執行部は、その組織論ゆえに、自治会員全員を支配することになるといふ現実を全く把握しきれず、自らの善意のみによる自治会運動は、民主的なものとなるといふ全くの夢を持っていた。

それは、自らが、運動を形成したことの無い全くのズブの素人的発想であった。ともあれ、二部学生連合は、自治会を民主化することにより、運動が大衆のものとなり、戦斗化されるのだという幻想を抱きつつ、斗争を続けるべく模索していった。

(iii) 二部学生連合の教育斗争論

さて、二部学生連合の学園斗争論は、端的にいうならば、それは現象面的には、カリキュラム改良斗争であり、本質的には学園民主化斗争論であり、基本的に改良主義斗争論であったといえよう。

そして立命館二部における自治会内左翼反対派の形成を、まさに運動皆無の状態から決定的に促進したこのカリキュラム斗争——学園民主化斗争は、大げさにいうならば、あを日突然まさに誰にも指導されずに自然発生的に一般学生の中から爆発した。そして二部学生連合は、その斗争全体のより有効な情宣機関、斗争調整連絡機関として、まず最初に法学部において大衆の基盤を獲得した。

かんがえるに、この斗争のスタートは、当時法学部二回生Dクラスのカリキュラム増設要求が最初の発端であった。すなわち、この斗争は、立命二部における専門科目の開講講座が、同じ立命の一部に比較しても、同大二部に比較しても、圧倒的に少なくほとんどの専門科目が総論と各論を合併するなど、全く簡略化してしまっている。ブルジョア大学における大学教育としても全く満足な授業が行なわれていない（これがブルジョア大学の本質なのだ）という全く当り前の不満から発生した。それ故にこの斗争の火は二部法学部の各クラスに飛び火し、法学部四回生のクラス決議や法学部二回生においても五クラス中三クラスにおける要求決議、一クラスの支持決議をなした。そのような情勢において、日共法自執行部は、それらの斗争に対する必死の妨害策動に狂奔し、辛うじて、自治会委員長の所屬する二Bクラスにおいて、非常に僅少差でその要求を退りぞける（この理由の一つには、現在のマル研四トログループの犯罪的な斗争放棄に由来することを我々は決して忘れてはならない。）等の、彼等の諸要求貫徹路線の党派的エゴイズムの実態をまざまざと大衆的に知らしめていた程の大衆の要求を全く無視した保守主義者としての立場に立ち、立命館支配体制の走狗として全く反動的役割を果したのである。

しかし、その斗いの炎は、次第に他の回生にも波及していった。四回生の各ゼミにおける支持声明、一回生の各クラスにおける真剣な討議が進行していき、他の学部におけるカリキュラム改善の要求の声は日々高まっていた。

った。

これらのカリキュラム改良要求斗争は、いわゆる体制内的改良斗争ゆえに本質的に全く立命館民主主義体制に対する補強策すぎないものとはなりはすれ、それに敵対するものではありえないものであったと今からは思われるのだが、何故にか大学当局||二部協議会は、ほとんど真剣にこの要求をとりあげようとせず、全ての要求は立命館民主主義の物質的保障たる自治会をとおさなければ無理だという全く形式的な技術上の問題を固執するのみで、その自治会を構成するかんじんの学生大衆とは直接交渉せず、学生大衆の意志と自治会執行部の言動が矛盾するどころか逆に敵対するものであるという現実には全く眼を向けない、官僚主義的な民主主義とは何の縁もゆかりもない全くの斗争圧殺策動に出たのである。（この時点において、二部学生大衆は「民主立命館」というものに対してその存在を疑い始めたのである。そしてその圧殺策動が何故のものであったかは、日共民青の新聞社襲撃、それに伴う大学当局||二部協議会の対応の中で学生大衆によって後に立命館民主主義の神話が粉碎された一九六八年一二月の時点において初めて理解されたのであった。）

さて、二部学生連合の学園斗争にもどらう。カリキュラム改良要求は、ごく常識のことだが、いかなるものかこのカリキュラムを規定しており、それをいかにすればカリキュラムを改正することができるのかというごく初歩の疑問を生ぜしめた。我々の斗争は最初そこから出発した。そして、我々は、それは昭和三八年年度の学費値上げ反対斗争の結果成立した、いわゆる「立命館民主主義」を補強しつつ、明白な夜間部独自の教学を掲げた二部対策要綱に到達した。

それでは、この二部対策要綱とはいかなるものであったかを簡単に説明してみることにする。さて二部対策要綱は、二部に非勤労学生が増加した結果、教育対象の質が変わったことを念頭におくにはおいたが、何故の変化には何等考慮せず、一方的に非勤労学生の切捨をはかり、その路線上において二部学生のみのもつ特殊条件——勉強条件、勤労条件、時間的制約——による弊害による二部教育の教学内容の改編というツギハギ的思考法に貫かれていることを銘記されておきたい。大雑把に言くと二部対策要綱は次の諸点にまとめられる。

① 二部学生の主要な特殊性「現に勤労しつつあるか、又は勤労を必要とするもの」というような大胆な非勤労学生の切り捨ちはかり、二部対策要綱の言葉を借りると、二部教学の対象を明確にした。

② 二部教学の責任体として一部の学部教授会に相当する「二部協議会」を確立し、それに属する事務組織と

して、二部事務室を設置した。

③ 教学内容の改善。具体的には、学問の現代化、総合化、共同化をはかる。

以上のような二部対策要綱に対して、二部学生連合を中心とするノン・セクトの部分はそれらを次のように理解することによって、その完全実現を要求した。

① 学問の「現代化」とは、転々進歩してやまない社会的取請に応え、現代的課題と現代的視点を追求することによって実践的知識を把握するよりな方向を意味する。(ここにも一歩誤ると産学共同の道が開かれている。しかし、これもいまからみると「立命館民主主義」にガンガラじめられていた我々にとってはそのことを歴史の目指す方向、人間解放斗争への現代的探究と善意に解釈していた。)

② 学問の「総合化」とは、社会や学校をめぐる生々しい矛盾や対立に苦しむ勤労学生に対する大学教育として、カリキュラムの思い切ったしかも内容を低下させない集中化と簡素化を行なうことである。(すなわち、我々は現在のよりな高度産業社会において、学問自体が、それぞれますます細分化され、専門化されていく傾向があり、その結果学問全体における総合的視点が欠落していく傾向がある。それに対する克服の方法として、一つの教科を個別的専門的に教えるのではなくて、他の学問の発達による新しい分野の解明をもとり入れた総合的な脚点に立った教育を行なうことであつたと解釈し、現在のデタラメな何等一つ一つの教学が他の教学と結びついていない実状を追求した。)

③ 学問の「共同化」とは、教科目「一般教育科目」、「共通専門科目」、「固有専門科目」の三本立として、これらの学問の専門化と総合化の有機的結合をはかることである。(我々は、これも総合化と同様に、学問の専門化傾向の結果、集中される弊害を克服するため、学部セクト、教科セクトをのりこえた真の意味での研究体制を指向することを意味するものであると理解していた。)

そして、二部学生連合は、その理論的支柱に改良斗争の傾向を有するが故に、一応このよりな構想を基本的に正しいものと規定する中で、現実におけるその形骸化・空洞化を止揚せしめ、その完全実施を追求する方向性を打ちだした。そしてその中において次のような見解を学生大衆に対して提示し、二部協議会に追求した。

① 学問の「現代化」、「総合化」、「共同化」が正しいとするならば、何故一部においても実施しないのか?
② 二部におけるこの三原理の実現は、端的に云うならば、科目の統廃合や、科目に「現代」という名をかぶ

せるだけで終わっている。すなわち、大学当局の「現代化」とは、「現代」と名のつく科目を作ることで終わっているし、「総合化」とは、教科を合併することであり、「共同化」とは、全学部にまたがる共通の科目を作ったことしか意味してゐない。

③ 一般教育と専門教育の連関性が全く存しない。

④ 専門教育を学ぶための「原論部門」の覆習をもっと早くするべきである。

⑤ 「刑法」等に見られるように風聞部で分けて、すなわち「総論」と「各論」で別々に講義していても終了できない科目を総合すれば、なおさら満足な大学教育となる筈がない。二部対策要綱の「内容を低下させない」と全く矛盾するではないか?これはほとんどどの専門科目に共通する問題である。

⑥ ゼミ・クラスをもっと多彩にすべきである。現在のよりな限られた科目では、自らの選ぶゼミが存しない。

⑦ 外国語教育をもっと熱心にやれ。

⑧ 二部専用の体育施設を作れ。

⑨ 二部専用教官をもっと増やせ。e t c.

等であり、これらを解決しないことには、大学当局の主張する学問の「現代化」、「総合化」、「共同化」の主張は、全くの経営合理主義を隠蔽するものであると批判した。

しかし、これらに対して二部協議会II大学当局は、二部対策要綱の理念の現実的な追求を図ろうとせず、その学問の理念の實現が可能であるというデマゴギーをふりまいた。それがいわゆる「転部制度廃止」である。

「転部制度廃止」の理由として、大学当局は次のような見解を述べている。

① 二部における非勤労学生の増大は、勤労学生志望者の入学を困難にする。

② 又、非勤労学生の増大は、二部教学の対象をアイマイにさせる。

③ 非勤労学生の大部分は一部への転部を考えているため、それに失敗した時、大半が墮落する。

④ 一部に転部した学生の成績が非常に悪い。

⑤ e t c

我々はこれに対し、以下のような反論を行なった。

① 二部における非勤労学生の増大に関する責任は、全て大学当局の二部教学の宣伝に対する不熱心さから派生したものであって、当の学生に帰せるのは不当である。

② 二部に入った非勤労学生が何故に一部へ転部したがるのか、それに対する問題究明が不十分である。

③ その原因は一部と二部の教学内容の差にあるのではないか。一部と二部の教学内容が等しかったら誰も転部を考えずに、逆に二部に在籍している方が有利と思うのではないか。

④ そのことは、先に述べた当局の④の見解からも推測される。

⑤ 故にここで「転部制度」廃止を打ちだすのは明らかに自己の責任を転嫁するものであり、何等問題解決の方法とはなりえない。

⑥ それよりも先に二部対策要項の基本的理念の実現をけかすることこそが、究極的な問題を解決する方法ではないか。

それに対し、大学当局は二部協議会が我々の要求を無視し、「転部制度」廃止を強行することによって、その返答を行なった。

ここに、二部対策要綱がうたっている学問の「現代化」「総合化」「共同化」というものが、実際においては全くのブルジョア大学の経営合理主義にすぎないものであり、実に現状の理念の空洞化は最初から予定されていたものであり、というよりは、理念の実現は最初からありえないものであり、それは国家独占資本主義体制下においてブルジョア大学というものが当然歩むべき資本の論理が、民主主義の皆と称する我が立命館においても全く例外ではありえず、この二部対策要綱というものが単なる人集めのためのキャッチ・フレーズにすぎず、本質的に二部学生を一部学生よりも、もっとも低劣な教育内容しか与えない、全くの職業訓練学校的教育にすぎないことが二部学生大衆によって理解された時、立命館は「反体制」大学の幻想は打倒されたが、そのことはかえって、二部学生大衆を一種の無力感——その打破すべき方向性が見出せなかったため——の方向へおしやり、そのため斗争は大学当局と二部学生会のたい日共スクラムの前にもろくもはねかえされた。いうならば二部学生大衆は今日のような全共斗運動によるブルジョア大学解体の地平にまで理論的に到達しえず、それ故に日共大学における改良斗争の可能性が学生大衆の力によってはありえず、一党派は日共のみによってだけ可能であるという現実が大衆の前に重くおぼさってきたからであった。このようにして、立命二部にお

けるカリキュラム改良斗争は基本的に挫折し敗北していった。

さて、我々がこの斗争の中で忘れてはならないのは立命館において現在全共斗運動が一時的に停滞している時に、我々全共斗と学生会一派を相互に批判しながら、大衆に対してイイ子ちゃんズラをしている二部における四トログループの諸君が当時行なった犯罪的反革命的行動であろう。

彼等は、最初は我々とともに二部学生連合の結成に積極的に参加し、自由連合主義理論を自らも強力に推進したにもかかわらず、まさに、立命館二部における新しい斗争が起った時には、彼等は何等その運動にかかわってくるところか、いつのまにか二部学生連合からもその姿を消し、全く公私混同した私人的理由で戦線から逃亡したばかりか、二部学生連合個人個人に対するヒボウ中傷をくりひろげることによって、まさに彼等トロッキスタが彼等自身の主張を何の説明もなくくるかえることによって、まさに全く自己の論理を欠落したところの言葉をもて遊ぶと業ろの犯罪的な政治的ゴロッキであり、彼等自身の存在は、大衆の斗争に敵対するばかりか、まさに人民学生大衆にとって権力から我々自身に送りこまれたトロイの木馬であることを証明した。そして彼等の反革命的犯罪性はまさに以後の斗争の中においても証明されてくるので以下に順に述べていくことにする。

(ii) 二部学生連合の政治斗争論

二部学生連合が民青の破壊策動と現在のマル研四トログループの犯罪的な裏切りにもかかわらず、二部法学部において大衆的に登場した丁度その時、旧三派全学連は四二年一〇月八日、佐藤の訪グエトを阻止するために第一次羽田斗争を武力斗争として貫徹した。これがいわゆるゲバ棒とヘルメットによる武装斗争による大衆的基盤での最初の斗争であった。

このいわゆる武装斗争は、立命二部においてカリキュラム斗争などを通じて次第次第に運動体として形成されてきた二部学生連合に対して多大な衝撃を与えた。

二部学生連合内部のノン・セクトのグループは、いわゆる武装斗争を評価するのに当ってこの斗争方法が非暴力斗争かの論争を行ない、当時の段階ではゲバ棒とヘルメットは防衛的なるものでは非暴力斗争の域を脱していないという結論に達し、この斗争の歴史的意義を基本的に認め、街頭斗争におけるこの斗争方法の有効性を評価し、自らも積極的に第二羽田斗争、佐世保斗争、三里塚斗争へと現地派遣団を送りこんでいったのである。それでは二部学生連合は何故に、この武力斗争を「非暴力」であると規定したのであるか。それには、戦后

大衆運動として展開されてきた学生運動の歴史をふりかえってみる必要があるだろう。戦後の学生運動は端的にいうならば、国家権力の手先、例えばデモにおける機動隊などによる弾圧の歴史であった。そして現在我々が暴力学生とよばれているこの事実が、暴力学生のイメージであるゲバ棒を我々が握る以前から存在していたことを我々は銘記しておく必要があるだろう。云々ならば、我々は過去一貫として暴力学生であり、現在もそうであり、未来もそうであろう。我々がたとえ戦術をダウンしたとしても、そのことは事実として我々にせまってくるのである。それは我々の斗争がまさに反権力斗争であり、本質的に反体制運動であり、それが権力者の気にさわるからそうなるのである。

ふりかえってみると我々がたんにデモンストレーションの意味においてさえ、街頭デモを法の規制なく行なうことがいつから不可能になったのであるうか。

日本国憲法は、我々に表現・集会・結社の自由を認め、そこから必然的にデモをする権利が生まれると我々とは長年の間教えこまれ信じてきた。しかし、よく考えてみると自由が認められるという規定そのものがおかしいことに気づく。誰によって認められるのか、自由が。ルソーは、「人間は生まれながらにして自由であり、人間はその生まれながらにしてもっている自由を最大限防衛するために、最少限の自由を供出することによって社会を形成した。」と述べている。それ故に自由とは、神聖不可侵のものであり、表現の自由とはひきしくその自由が存在しているか否かのベロメーターであり、人間にとって表現の自由を失うことは、全ての自由を奪われたことと同様である。それ故に、我々の意志の表現形態たるデモは、何ものによっても規制されるものでは決してありはしないものでなければならぬものである。

しかるに、現実はそのようにはありはしない。国家権力は我々の表現の自由を圧殺することに自己の利益をみいだし、デモの規制を行ないそれを打ちやぶろうとする斗力部分の破壊者暴力学生と自らの陰湿な暴力を全く秩序の維持という美名で正当化したまま、現象面的暴力に対する反暴力キャンペーンをくりかえしてきた。公安条例により、公安委員会は、デモのコースさえ勝手気ままにかえ、シュプレヒコールさえ騒音と規定することによって禁止することさえできる。そしてプラカードや旗さえも我々から奪いとりとうとしてくる。こんな状態で果して「デモ」が存在するのか。等はずでしかありえない。それ故に我々は奪われた自由を奪いかえし、人間の尊厳を防衛するために、実力で機動隊の包囲網を粉砕することを決意したのであり、ヘルメット・ゲバ棒は、

その目的を貫徹するために必要な最少限の装備であったのである。誰がみてもこのヘルメット、ゲバ棒は国家権力の走狗たる機動隊の重装備と比較するならば子供のオモチャに等しいものといえるだろう。

また角度をかえて「暴力」というものを考えるならば、果して「暴力」とは何であるかという疑問が生まれる。果して「暴力」とは何か。例を挙げてみよう。

子供同志がケンカしており、一人の強い子供が一人の弱い子供を棒切れや石でもってなぐっている。これは誰がみても暴力であろう。しかし、今なぐっていた強い子供が、同じように棒切れをもって、一人前の武装した大人になぐりかかってくる場合を想像してみよう。この場合勝敗は明らかであろう。そしてこの子供を暴力児童というものはいるだろうか。むしろ、世人は大人の方を責めるであろう。この関係が機動隊と学生の関係にあてはまるのではないだろうか。

この簡単な例からみても「暴力」とは非常に相対的なものであることが分かるだろう。この論理でゆくと非支配者にとって内ゲバは暴力であるが外ゲバは非暴力となる。このようにして、我々は失われた自由をとりかえすために実力斗争を行なう決心をし、いわゆる「武装」をしたのであるが、これはその受身的姿勢からも、暴力といえるほどのものではないえなごうと考える方が無難であろう。しかし、これを武装と称することによって本質的な武装への転換を武器の向上という面にすりかえることができることも忘れてはならない。

以上のように二部学生連合はいわゆるゲバルト斗争を非暴力直接行動の一種と規定しながら、一九六八年十一月佐世保斗争を迎えるのである。二部学生連合の佐世保斗争はマル学同中核派のスローガンと全く酷似した「佐世保を第三の羽田に」のスローガンをもって斗われた。そして「佐世保を第三の羽田に」は、マル学同中核派のゴロ合わせの便宜的な使い方と違って我々はそれをこれから以降の斗争への根源的追求への意志確認と規定した。

すなわち、「佐世保を第三の羽田に」とはいつてみるならば、第一、第二羽田斗争のように政府権力とマス・コミの反暴力キャンペーンの中でそして既成反体制陣営のヒポウ中像という四面楚歌の中で孤立しながらも、まさに自己の実存をかけて斗ったことに意義をみだし、佐世保斗争がいかに左翼陣営、ブルジョア側から多くの批難をまび、どのようにのしられようとも、それを自らの生命の呼び声として、永続的恒常的に闘い抜く、それも第一、第二羽田斗争の闘いの規模よりも質的にも量的にも低下させることなく闘いつづけることを意

味し、佐世保斗争以後の斗いも一歩もひかずにかうことなく確認し合つたのであり、まさにプロ軍の「エンタープライズをボチヨムキンへ」のスローガン——本質はどうか知らないが発想はユニーク——と相呼応した斗争への姿勢を示すものであった。

しかしながら、二部学生連合自身は自らの歴史上において自然発生的組織であるということにおいて、全国政治グループと全く隔絶した孤立した一集団にすぎないという欠陥を有していた。

そういの中で、第一次羽田斗争を起点としつつ、当時立命に現存する最大の戦斗集団と目されたマル学同中核派との共斗という路線が提起され、二部学生連合独自の現地派遣斗争が事実上不可能なことも相まってマル学同中核派とのハネムーン時代が招来した。この全国的政治集団と地方一ノン・セクト集団との相互関係において動揺する部分が現われ、その結果マル学同中核派支部の結成が行なわれた。(このようなハネムーン時代は、大体五月頃三里塚斗争の総括をめぐって崩壊する。)

このようなまさに流動的な情勢においても四トログループは、これをたんにブチ・ブル急進とののしるだけで、自己の斗争を展開するどころか学園にさえも姿を現わさなかった。

このようにして、二部学生連合は未熟でありながらも一歩一歩自分の道を切り開き、試行錯誤をくりかえしつつ、旧三派全学連の歩んだ道と同じ方向へ歩んでいった。そしてこのような斗争経験を踏まえた上で、二部学生連合は結成以来最初の新入生を迎えるべく四三年度斗争へ突入した。

(以下次号)

救対カンパの願

去る十一月五日未明、大菩薩峠において官憲により逮捕された学友三名が現在府中刑務所に留置されています。花大のバリエードの中から出撃した同志に対し我々は独自の救対を展開していますが人手不足の為、充分な活動ができません。獄中斗争を貫徹している同志に対して読者諸兄のカンパをお願い致します。

花大救対本部
連絡先 京都市右京区花園木辻北町一
花園大学学生会館内
花大救対本部

社会主義の下での人間の魂

オスカー・ワイルド著
はしもと よしはる訳

B6版 定価一八〇円

バルカン社

「不定形」投稿要項

ジャンル||論文・小説・評論・詩・その他
テーマ||自由
枚数||無制限
(四百字詰原稿用紙四〇枚を超える時は、二回以上に分けることがあります。)
締切||不定
(好きな時にどうぞ)

送付先||京都アナキズム研究会

京都市右京区花園木辻北町一
花園大学新聞社 気付

不定期定期読者募集中

バック・ナンバーあります

◎創刊号 A5版 P56 ¥150 (残部少)

◎第四号 A5版 P54 ¥150

(〇二号三号は品切れ)

〔財政基盤安定のため御協力下さい。〕

辺 境 第一号 定価 ¥150

竜谷大学斗争とは何か (近藤 票)

— その歴史と今日をめぐって —

— 放逐者のノートより —

— 稲荷山女人喪失 (稲荷山太郎) —

— つれづれ「暴力」考 (三島修二) —

— 「……」 (松原知子) —

京都市伏見区深草開土町 稲友荘内
辺 境 の 会

編集後記

☆再び編集部へ復帰。ある日散歩して、ふと上を仰ぐと空は広大で奥深いことさえ忘れていたのに気がついた。とたんに迷いがいつきに吹き飛んだ。宇宙は広大であり、真理は多種多様だ。人々はそれぞれ道がある。俺の道は俺しか歩めない。人生は長いし、人間解放の道は果てしなく伸びている。千里の道も一歩から、何も急ぐことはない。俺は俺の道を自分の能力において歩めばよい。無理して他人のマネをする必要はない。こんな簡単な事が理屈はともかくとして実感として身につけていかなかった。長い二ヶ月だった。これからは地道にやるつもりです。

(小三木報淑)

☆不定形第四号が発行されてから早や四ヶ月過ぎた。四号は死号だとの噂が巷に流れる今日やと五号を刊行。京外大、京大、立命大、竜大、花大、同大と相続く封鎖解除に機動

隊導入。九月、十月、十一月と斗われた斗争、それに伴なり弾圧の嵐。

この中で不定形の同人のみならず、編集メンバーも逃亡したり逮捕されたりで四散し、原稿も散逸。それに加えて個人々々の忙しさ、ブラス会。これが五号の遅れた原因。

(井上未知夫)

☆六九年秋期斗争の決定的敗北、これを大勝利だと絶叫しなければ組織の壊滅をもたらす反日共系諸セクトは別にして、この現実を眼の前にして我々は新たな運動の方向を模索しなければならぬだろう。全共斗運動の新たな段階を我々は切り開かなければならぬだろう。

(秋月長脛彦)

☆月一回の例会の他に「暴力論部会」と「生物学部会」が発足しました。参加希望者は、事務局まで御連絡下さい。

(編集部)

集団「不定形」第五号

(@¥150 定¥35)

発行日 一九七〇年一月二〇日

編集者 秋月 長脛彦

井上 未知夫

小三木 報淑

堀本 吟

京都市右京区

花園木辻北町一

花大新聞社 気付

京都アナキズム研究会

振替 京都 8621